安来市内遺跡調査報告書１

伝・堀尾忠氏墓

日向尾根古墳群

平成 23 年 3 月

安来市教育委員会

安来市内遺跡調査報告書１

伝・堀尾忠氏墓

日向尾根古墳群

平成 23 年 3 月

安来市教育委員会

例　　言

1．本書は国宝重要文化財等保存整備事業費補助金（市内遺跡発掘調査等）を受けて、安来市教育委員会が平成21年度から22年度に実施した、安来市広瀬町富田に所在する伝・堀尾忠氏墓の発掘調査結果及び安来市伯太町赤屋に所在する日向尾根古墳群の測量調査の報告書である。

2．調査組織は次の通りである。

［調査主体］　安来市教育委員会

［事務局］

安来市教育委員会教育長　　伊達山興嗣
安来市教育委員会教育次長　　平井　禎
安来市教育委員会文化課課長　　原田　誠
安来市教育委員会文化課主幹　　水口晶郎
安来市教育委員会文化課主幹　　大塚　充
安来市教育委員会文化課主任　　坂根　丈

［調査員］

舟木　聡（安来市教育委員会文化課主幹）

［調査指導協力者・機関］

池淵俊一（島根県教育長文化財課）、足立正智（安来市文化財保護委員）、山根正明、岡崎雄二郎、西尾克己（島根県古代文化センター）、澤田順弘、新庄正典（松江歴史館）、城安寺、清山賢治、妹尾秀樹、上の台緑の村、フジテクノ有限会社

［調査参加者］

泉あかね、石原静枝、実重勝利、原田禮子、細井一広、細田章郎、山尾昭一、山口スミエ

3．本書の第2図には、国土交通省国土地理院発行25,000分の1のものを使用した。

4．本書に使用した実測図は、舟木、水口、坂根、泉が作成し、泉が浄書を行った。

5．本書に使用した遺構写真は舟木、水口が撮影した。

6．本書の編集・執筆は、伝・堀尾忠氏墓については舟木が、日向尾根古墳群については水口が行った。

7．本書に掲載した遺構の実測図及び写真は安来市教育委員会で保管している。

本 文 目 次

例言
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　伝・堀尾忠氏墓
第１節　位置と環境 …… 2
第２節　遺跡の概要 …… 5
第３節　石　　垣 …… 5
第４節　建 物 跡 …… 12
第５節　集 石 遺 構 …… 14
第６節　出 土 遺 物 …… 14
第７節　ま と め …… 21

第Ⅲ章　日向尾根古墳群
第１節　位置と環境 …… 25
第２節　調査の概要 …… 27
第３節　ま と め …… 32

写真図版

挿 図 目 次

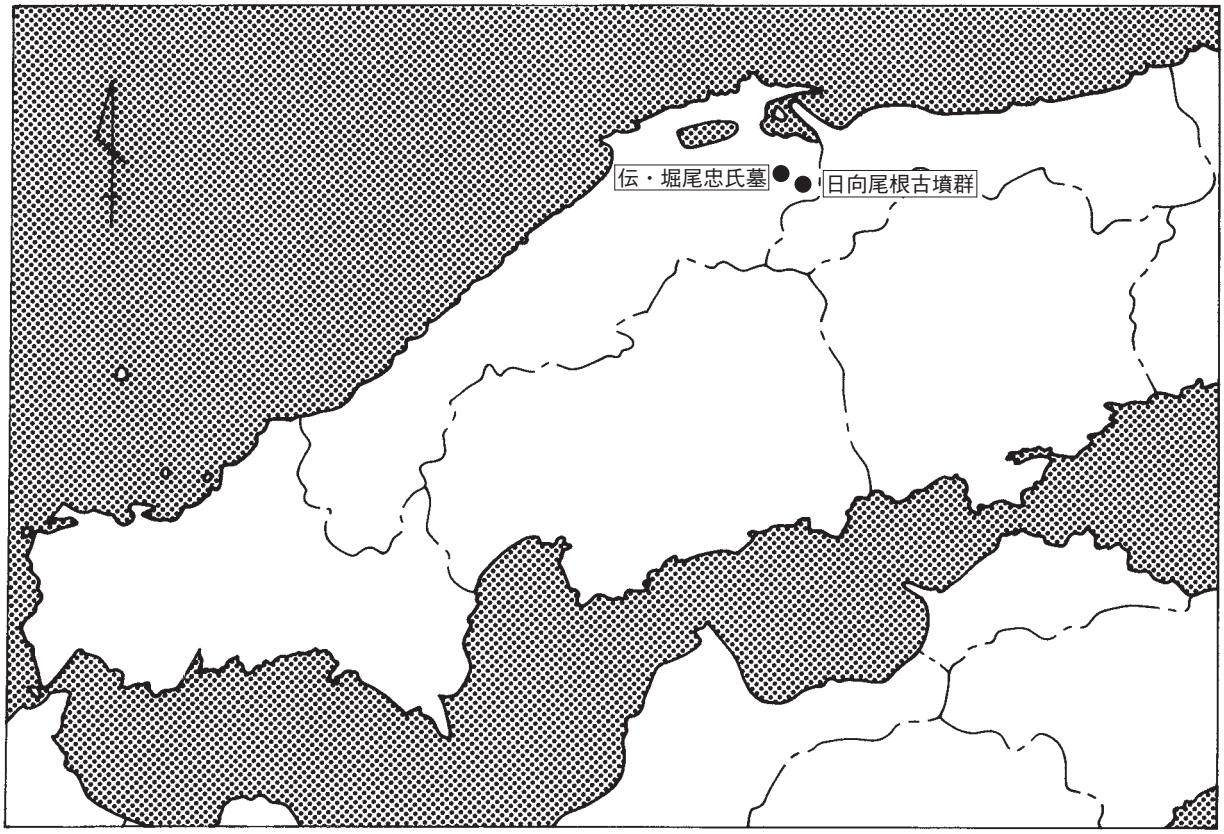
第１図　遺跡の位置 …… 1
【伝・堀尾忠氏墓】
第２図　周辺の遺跡 …… 3
第３図　調査前地形測量図 …… 6
第４図　遺構全体図 …… 7
第５図　石垣立面図 …… 9
第６図　石垣下トレンチ実測図① …… 11
第７図　石垣下トレンチ実測図② …… 12
第８図　平坦面土層断面図 …… 13
第９図　礎石建物跡断面図 …… 15
第10図　礎石建物跡内土壙及び集石遺構実測図 16
第11図　塀跡実測図 …… 17
第12図　集石遺構実測図① …… 18
第13図　集石遺構実測図② …… 19
第14図　出土遺物 …… 20
第15図　近世大名墓の構造の例 …… 23
【日向尾根古墳群】
第16図　日向尾根古墳群分布図 …… 25
第17図　日向尾根古墳群とその周辺の古墳群 … 26
第18図　日向尾根１号墳地形測量図 … 27
第19図　日向尾根２号墳地形測量図 … 28
第20図　日向尾根３～８号墳地形測量図 … 29

第Ⅰ章　調査に至る経緯

伝・堀尾忠氏墓は、島根県安来市広瀬町富田新宮谷に位置する。遺跡の南には戦国大名尼子氏の居城として知られる富田城跡があり、本遺跡の存在する新宮谷をはじめ、周辺には富田城に関連する遺跡が数多く存在している。本遺跡は古来より堀尾忠氏の墓であるとの伝承があるが、その場所には尾根上の三方に高石垣が築かれているものの、その上の平坦地には墓標の類もなく、平地の中央付近に大小の石材が乱立している状況であった。

そこで、将来的な史跡指定や保存をしていく上での基礎的な情報を得るために調査を行うこととし、平成21年度は石垣の立面図作成と石垣付近の試掘調査を、平成22年度は全体の地形測量図作成と平地部分の発掘調査を行った。

日向尾根古墳群は、島根県安来市伯太町赤屋に所在するレジャー施設・上の台緑の村の敷地内に所在する。この上の台緑の村は、中国山地の山並みを一望する場所にあるキャンプ場やコテージのあるレジャー施設である。周辺には多数の古墳が存在するが、同施設内にある古墳群の詳細な遺跡の範囲等が知られておらず、施設等の増設により一部損壊を受ける危険性があるため、遺跡の範囲を確定し保護を確実にするため、平成21年度に測量調査を実施した。



第1図　遺跡の位置

第Ⅱ章　伝・堀尾忠氏墓

第１節　位置と環境

安来市は島根県東端部、鳥取県との県境に接する市である。この地域は古代～近世にかけて、歴史学、考古学上重要な遺跡が数多く存在している。

今回調査を行った伝・堀尾忠氏墓の所在する安来市広瀬町周辺には、現在のところ古代の遺跡はあまり多く知られていないが、主に古墳や横穴墓など、いくつかの遺跡が知られている。

縄文時代の遺跡としては、平成15年度に発掘調査が行われた土居成遺跡において、遺跡東南の谷部（Ⅱ区）で落とし穴２基と、縄文後期（四元式及び中津式並行）の土器類、石斧、石鏃などが出土している。また宮尾遺跡でも縄文土器片が採集されている。

弥生時代の遺跡は、現在のところ確認されていないが、富田川河床遺跡において流砂層内から弥生後期の土器が出土しているため、飯梨川の周辺部に遺跡が存在すると思われる。

古墳時代になると遺跡数が急激に増加する。ほぼすべてが古墳及び横穴墓であり、大型の前方後円墳２基の他、多数の古墳が存在する佐々彦神社裏古墳群や、保存状態の大変良好な金銅装環頭太刀を出土したかわらけ谷横穴墓群など、安来を代表する重要な遺跡もみられる。

奈良・平安時代になると、遺跡の数がまた減少し、近隣では鬼瓦が採集されている石原遺跡が知られる程度である。

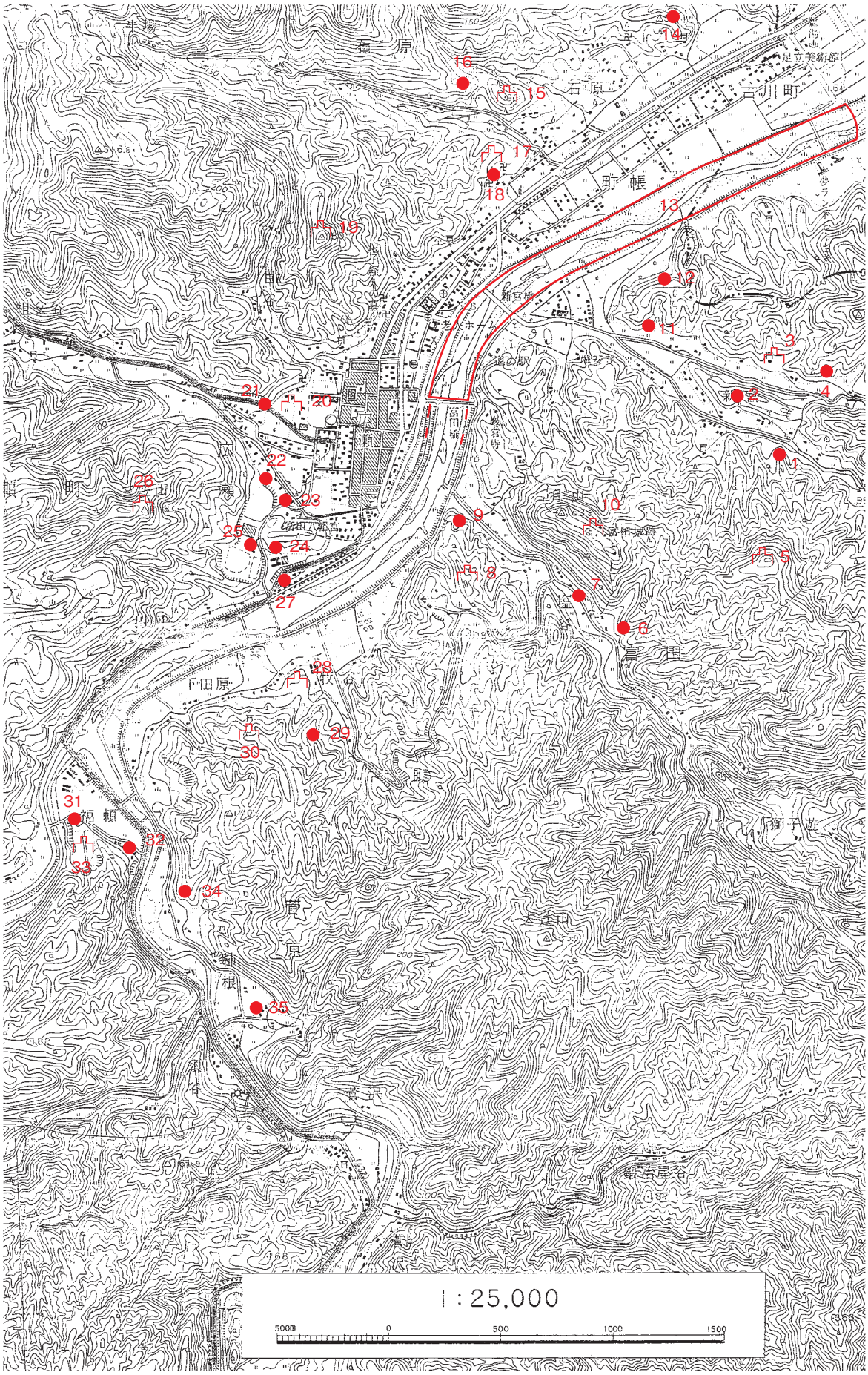
中世に入ると、当地域が出雲国支配の中心地として繁栄した事実などから、城館や都市の遺跡が多数みられるようになる。

富田城跡は、出雲守護京極氏の守護代から中国地方屈指の戦国大名へと成長した、尼子氏の居城として有名な城郭跡で、永禄９年（1566）の尼子氏滅亡以後は、毛利氏、吉川氏と城主が変わり、慶長5年（1600）関ヶ原の戦いの戦功により堀尾氏が入城したが、堀尾氏が松江城を築いてそこへ本拠を移したことにより廃城となった。昭和９年（1934）に国の史跡に指定された。

富田城の周辺には、尼子氏一族で、尼子軍の中核を担っていた新宮党の居館跡と伝わる新宮党館跡、天文11年（1542）に出雲に侵攻した大内義隆が本陣とし、また永禄９年（1566）の毛利元就による富田城攻略戦の際には、毛利軍が陣を敷いた京羅木山城砦跡群や、勝山城跡などの陣城群。平成15年度に中学校建設に伴って調査が行われ、空堀を伴う城館跡が確認された土居成遺跡など、数多くの城館遺跡が存在している。

また、集落遺跡としては、江戸時代の寛文６年（1666）の洪水により壊滅した富田城城下町の遺跡である富田川河床遺跡が著名である。

近世・近代の遺跡としては、先述した富田城跡や富田川河床遺跡の他、寛文６年（1666）に成立した広瀬藩の藩邸跡といった城館や集落跡の他、塩谷焼窯跡などの生産遺跡があり、また、月山山麓の巌倉寺境内には、堀尾忠氏の父であり、松江開府の祖として知られている堀尾吉晴の墓も存在している。


1:25,000
500m
0
500
1000
1500
石原
石原
吉川町
足立美術館
帳町
新宮橋
富田城跡
下田原
獅子遊
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

第２図　周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡

	名　　称	種　　別	概　　要	備　　考
1	伝・堀尾忠氏墓	古墓	石垣、建物跡、瓦	本報告書掲載
2	新宮谷遺跡	城館跡	建物跡、陶磁器	
3	新宮党館跡	城館跡	建物跡、陶磁器	県史跡
4	富田三太良遺跡	城館跡	備前壷、瀬戸天目、白磁	
5	日向丸城跡	城館跡	曲輪、堀切	平成11年一部発掘
6	伝・尼子晴久墓	古墓	宝篋印塔	尼子経久墓説あり
7	塩谷遺跡	城館跡	石列、建物跡、道路跡	
8	明星寺・塩谷城館跡群	城館跡	曲輪、土塁、堀切	
9	塩谷焼窯跡	窯跡	窯跡１基、物原	明治17年頃廃窯
10	富田城跡	城館跡	曲輪、堀切、石垣、土塁、建物跡	国史跡
11	宗松寺跡	寺院跡	石垣	伝・毛利元秋墓
12	洞光寺跡	寺院跡	墳墓基壇	
13	富田川河床遺跡	集落跡	建物跡、井戸、道路跡、陶磁器	富田城城下町跡
14	佐々彦神社裏古墳群	古墳・横穴	前方後円墳、横穴墓	
15	石原城跡	城館跡	曲輪	
16	広瀬梨柿園遺跡	古墓？	備前壷１、土師質土器30	
17	亀井ヶ成・誓願寺裏城砦跡群	城館跡	曲輪、土塁、堀切	
18	仏心焼窯跡	窯跡		昭和６年創業
19	大成山城砦跡群	城館跡	曲輪、土塁	
20	広瀬藩邸跡	城館跡	堀、石垣、建物跡	
21	祖父谷丁石塔群	古墓	五輪塔、宝篋印塔	
22	伽羅久利神社遺跡	散布地		
23	上広瀬遺跡	集落跡	竪穴住居	消滅
24	上広瀬焼窯跡	窯跡		明治27年頃廃窯
25	宮尾Ⅰ・Ⅱ遺跡	散布地	縄文土器	消滅
26	三笠山城跡	城館跡	曲輪	
27	八幡山横穴墓群	横穴	須恵器	大部分消滅
28	土居成遺跡	城館跡	建物跡、堀切、陶磁器	
29	カジズタ古墳	古墓？	焼土壙３	
30	寺山城跡	城館跡	曲輪、竪堀	蓮華峰寺山砦
31	福頼古墳群	古墳	方墳２基	
32	福頼鈩跡	製鉄遺跡	樋	
33	福頼遺跡	城館跡	曲輪、堀切、土塁	消滅
34	才の神焼窯跡	窯跡		明治21～大正４
35	越峠焼窯跡	窯跡		明治14年創業、消滅

第２節　遺跡の概要

伝・堀尾忠氏墓は、新宮谷の前谷に所在する。谷に向かって細長く伸びる尾根の先端部を削平して、南北約20ｍ、東西約20ｍの平坦面を造成し、周囲には北･東･西の３方に石垣が築かれている。

平坦面のほぼ中央には、大小の石材が乱立しており、そこが堀尾忠氏の墓として祭られている。

当地は古くから堀尾忠氏墓の伝承地として地元民などにより清掃されていたが、石垣及びその前面には多数の樹木が繁茂し、それにより石垣の所々が孕み、一部の石材は転落している状況であった。

調査はまず、平成21年度に北、東、西の石垣について立面図及び断面図を作成し、前面に各１箇所トレンチを設定して、石垣の構築状況について確認するための調査を行った。明けて平成22年度は、調査地全体の地形測量図を作成し、平地部分について遺構の状況と内容を把握するために発掘調査を実施した。

第３節　石　　垣

石垣は北・東・西の３方に築かれている。石垣の積み方は荒割石を積み上げた野面積であり、大きな石材の間に小さな石材を噛ませている。横目地は通っている部分はあるが、全体的に雑な印象を受ける。北東の隅角石には算木積を志向しているとみられる部分もあるが、基本的には明確な算木積は用いられていない。

石垣に使用されている石材は、主として付近で産出する山佐花崗岩や布部花崗岩が用いられているが、ごく一部に異なる石材も混在する。

⑴　東面石垣

東面の石垣は長さ約13ｍ、高さは崩落している北端部が最大で約３ｍであったと推定される。北側隅角部は上半部が崩落しているが残存下部は算木積状になっている部分が確認できる。天端部の石材は一部を除いて多くが崩落している。

トレンチは幅約１ｍ、長さ約3.2ｍのものを石垣北端から約3.5ｍ南側の位置に設定して調査を行なった。その結果、硬い真砂土質の地山を削平し根石を据えた後、造成の際生じた廃土とみられる土を利用して石垣の前面にテラスを造り出していることがわかった。出土遺物は表土層中から平瓦の破片が１点出土している。

⑵　北面石垣

北面の石垣は長さ 13.4ｍ、高さは最大で約３ｍを測る。天端部はほとんどが崩落しており、中央部と西部に一部が残存しているのみであった。

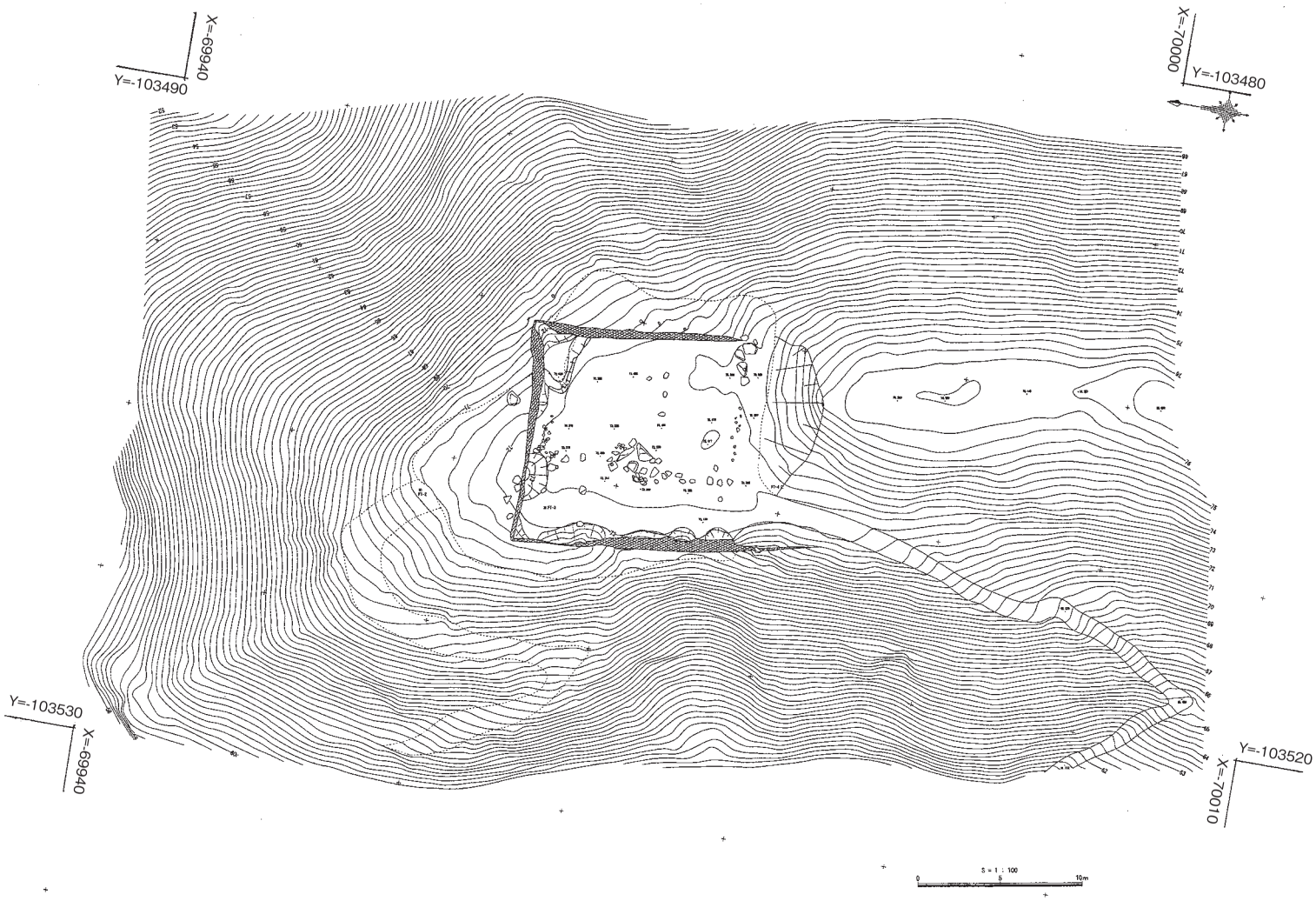
西の隅角部から東へ約5.8ｍのところにトレンチを設定して調査を行ったところ、深さ約30㎝で遺構面と思われる地山を検出した。遺構面上の堆積土はほぼ表土である腐食土のみであり、腐食土内からは平瓦や丸瓦の破片が比較的多く出土している。

⑶　西面石垣

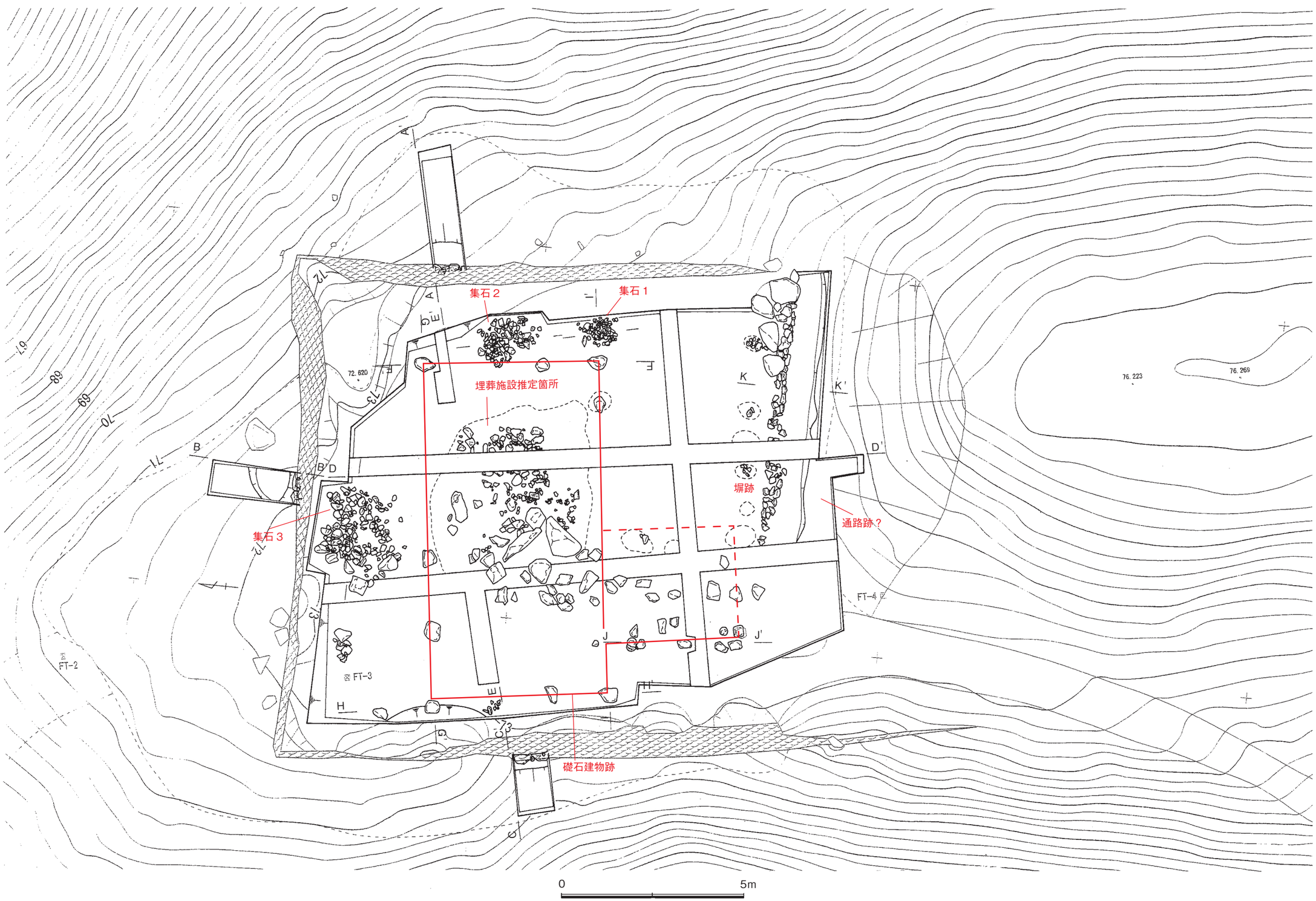
西面石垣は、長さ 16.2ｍ、高さ約2.8ｍを測るが、長さについては南側にもう少し伸びる可能性がある。

天端部はほとんどの石材が崩落しており、数箇所を残すのみである。石垣の高さは北端部が約1.2ｍ、南部は崩落が著しいが、北端部とほぼ同じ高さであったと思われる。中央付近は谷部のため、約2.5ｍを測る。

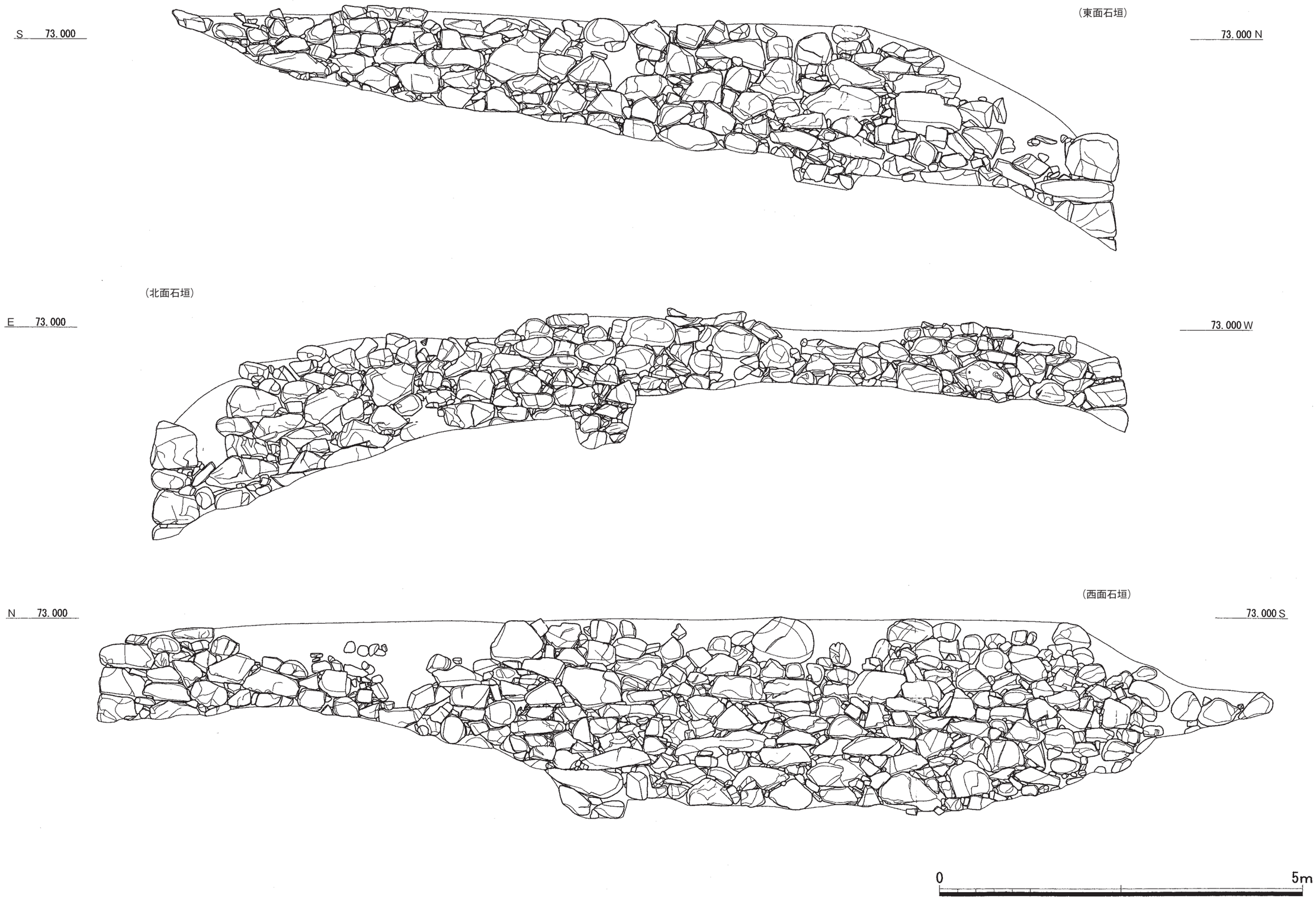
トレンチは北西隅角部より南へ約6.3ｍのところに設定して調査を行った。その結果、斜面を削平して根石を据え、根石の前面に黄褐色砂質土を盛って狭い空間を造成していた。出土遺物は表土層中から古唐津の鉢もしくは徳利とみられる底部片が出土している。



第3図　調査前地形測量図（S＝1/400）

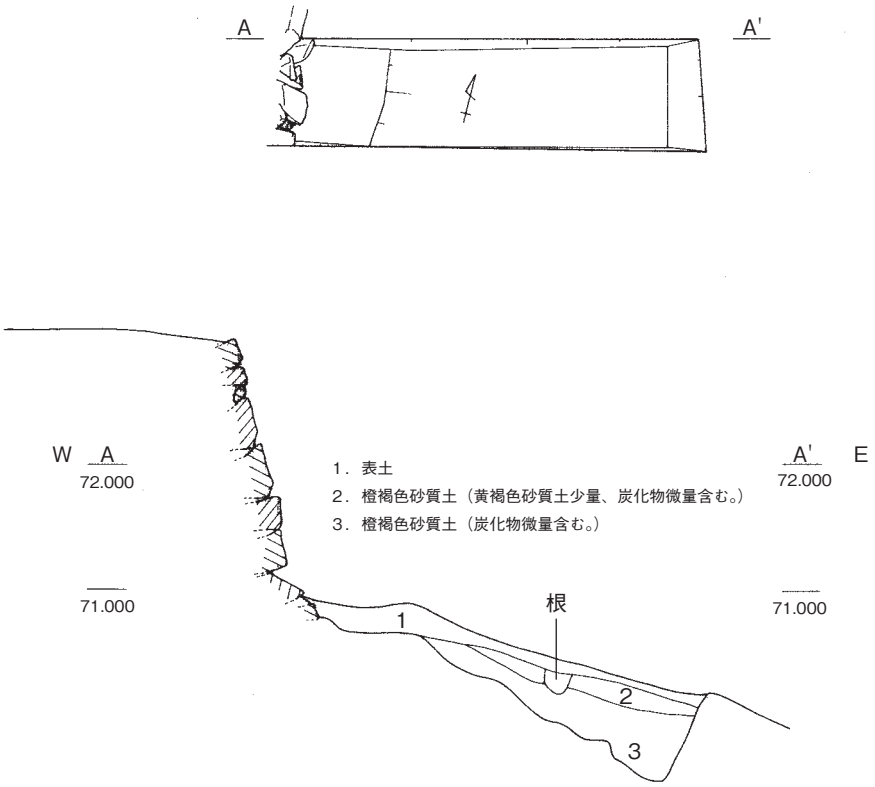


第４図　遺構全体図（S＝1/100）

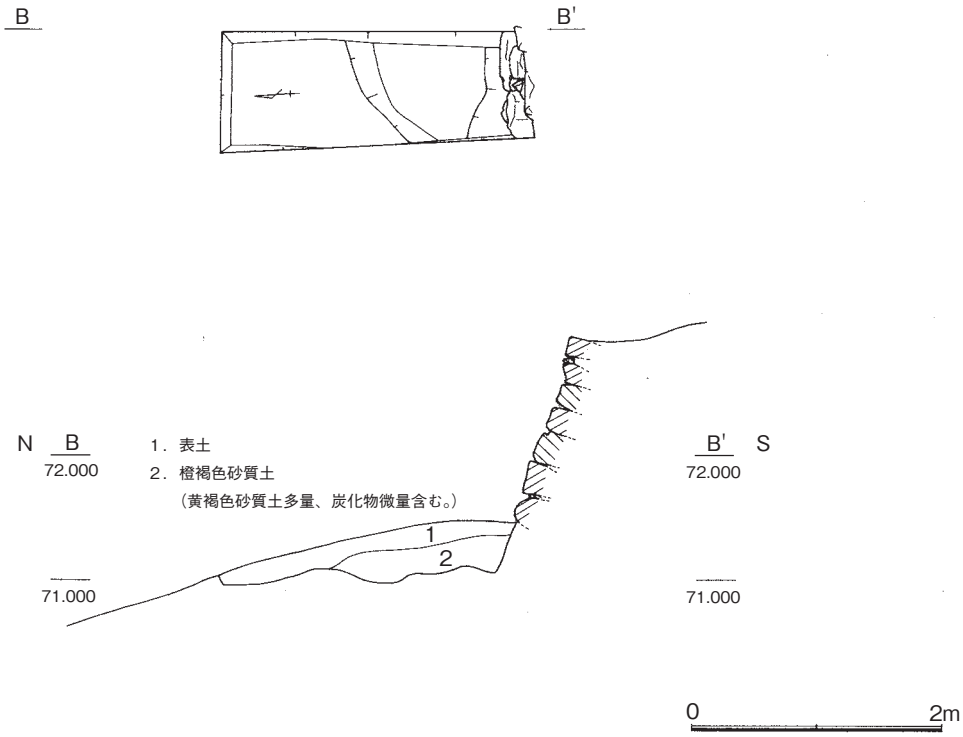


第5図　石垣立面図（S＝1/50）

（東面石垣下トレンチ）

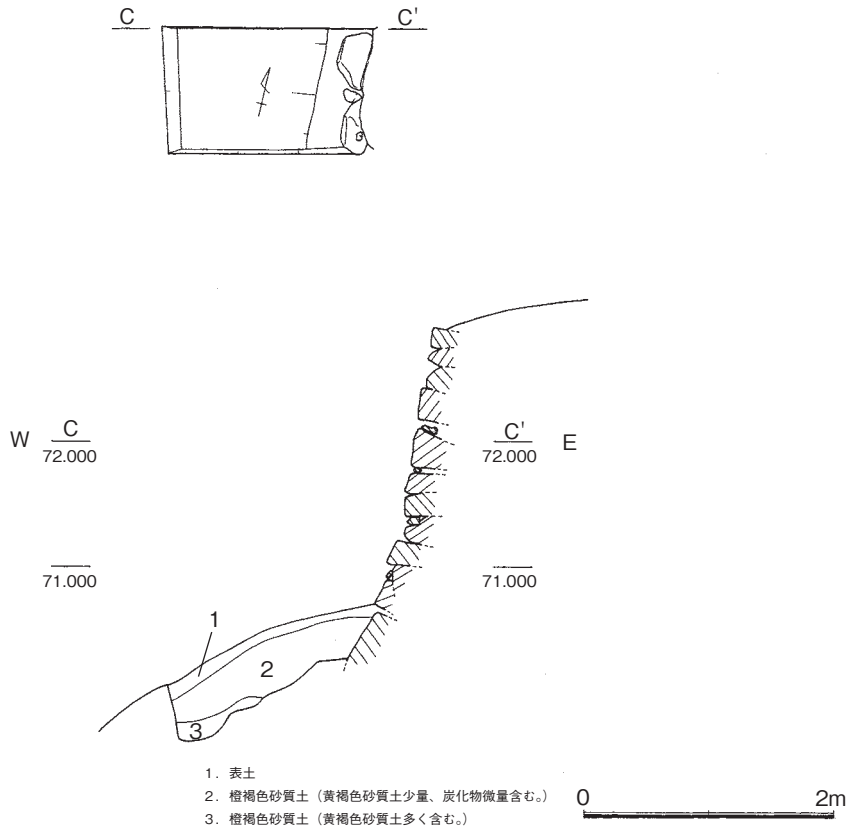


（北面石垣下トレンチ）



第6図　石垣下トレンチ実測図①（S＝1/60）

（西面石垣下トレンチ）



第７図　石垣下トレンチ実測図②（S＝1/60）

第４節　建　物　跡

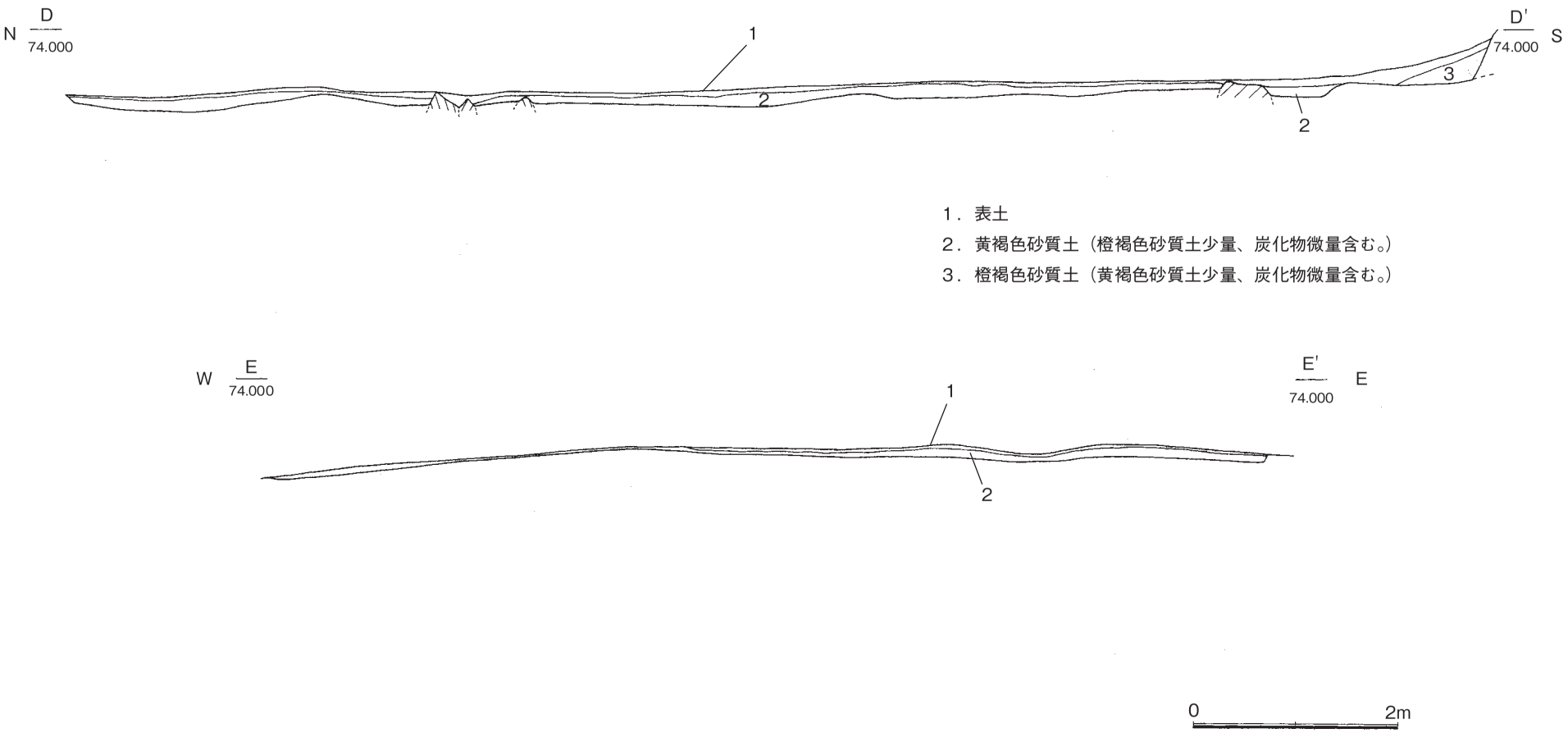
(1)　礎石建物跡

東西約4.8ｍ、南北約９ｍを測る３間×４間半の礎石建物跡である。所々の礎石が抜かれ失われているものの、隅部の礎石は全て残っていた。礎石の間隔は、東西軸と南北軸で異なっており、東西軸を約1.89ｍ、南北軸は約1.6ｍを志向しているとみられるが、東西軸は南列東側において約半間の間隔で据えられた礎石があることから、北列に関しても同様な礎石の配列がなされていたと考えられる。

また、建物跡の南西部では南北約3ｍを測る逆コの字状に配された礎石列を検出した。南北両端部は礎石を４個方形に配している。この礎石列の性格は、門跡の可能性も捨てきれないが、礎石建物跡と近接した状態で検出したため、向拝など礎石建物への入口部分である可能性がある。

礎石建物の構造としては、平面形からみておそらく切妻造もしくは入母屋造の平入で、前面に向拝などが付属した建物であったと考えられる。瓦葺きであったかどうかは現時点では断定できないが、瓦の出土量が極端に少なく、軒瓦などの飾瓦の類も皆無であることから、屋根はこけら葺や檜皮葺であった可能性が高い。

礎石建物跡内側の中央からやや東に寄った箇所では、一辺約２ｍの範囲にわたって、山佐花崗岩を主体とする大きめの割石が用いられた集石遺構があり、さらにこの集石遺構を囲むように存在する直径約4.5ｍを測る不整円形のプランを検出した。プラン内の覆土は橙茶褐色の砂質土で、ピンポールを刺してみると、中央の集石に向かって緩やかに傾斜していくように感じた。このプランは基壇など墓壙上部の構造物に関する地業の跡の可能性もあり、もしそうであれば集石遺構の直下には埋葬施設が存在すると推定される。



第８図　平坦面土層断面図（S＝1/60）

また、礎石建物内は西側では遺構が検出されず、ここが礼拝などを行うための空間であった可能性もある。

⑵　塀　　跡

調査区南端で検出した遺構で、東側石垣南端部からほぼ真西へ７ｍに渡って石列が続いている。石の並びがやや乱れている部分もあるが、基本的には幅約１ｍの浅い溝の北側壁面の内側に沿わすように角形の石材を２列に配する構造をとっている。東端付近には大型の石材が配されているように見受けられるが、一部の石材は塀跡の石列の上にかぶさるように存在するものもみられ、規則性が感じられないことから、これらの大型石材は塀跡には直接関係ないものと思われる。また、塀跡の石列と並行するように、集石を伴うピットが３基存在しており、これは塀を支えていた控柱の跡と思われる。推定柱間距離は約1.8ｍ程度と考えられる。

第５節　集 石 遺 構

⑴　集石遺構１

礎石建物跡の東側で検出した遺構である。遺構面上に南北約1.1ｍ、東西約80㎝にわたって礫が集中しており､わずかではあるが瓦片も混ざっている。石材は山佐花崗岩を主体としている。

⑵　集石遺構２

集石遺構１と同様に礎石建物跡の東側で検出した遺構である。集石遺構１から約1.5ｍ程度北側にある。

遺構面上に南北約1.7ｍ、東西約1.5ｍにわたって礫が集中しており、わずかではあるが瓦片が混ざっている。石材は山佐花崗岩を主体としている。

⑶　集石遺構３

礎石建物跡の北部で検出した遺構である。集石遺構１・２に比べてやや大きめの礫を使用し、規模は南北約2.3ｍ、東西約2.8ｍにわたっている。礫に混じって平瓦や丸瓦の破片が多く出土している。石材は山佐花崗岩を主体としている。

第６節　出 土 遺 物

⑴　土器・陶器

第14図１は土師質土器の皿である。手づくね成形のいわゆる京都系の皿で、口径約11.5㎝を測る。口縁付近の器壁の厚みは約7mm とやや厚めで、富田城跡をはじめとする周辺遺跡から出土している同種の皿としては比較的新しい時期に属すると考えられることから、この皿も近世初頭頃のものとみられる。

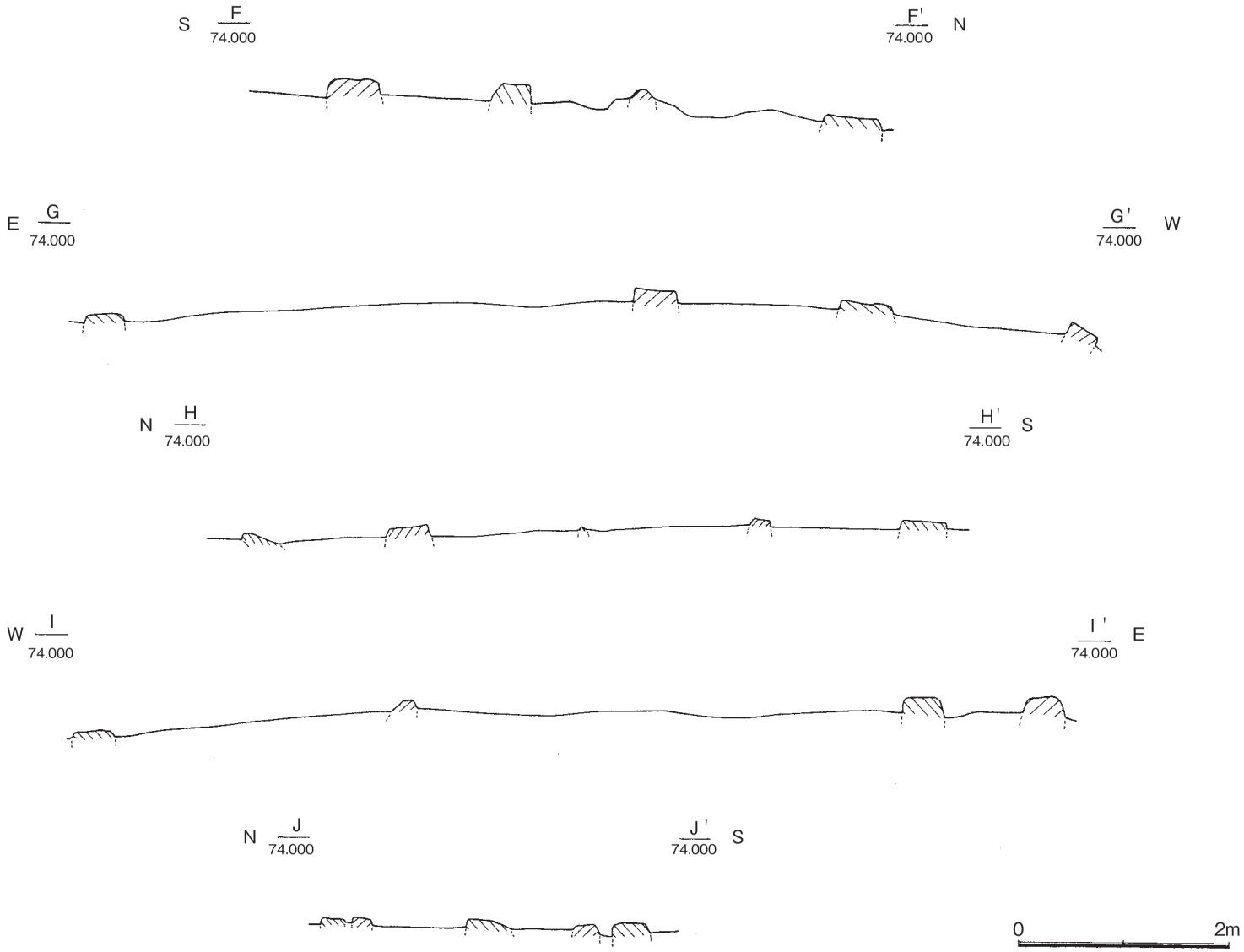
２は唐津焼の鉢の底部とみられ、底径は約13.6㎝を測る。タタキの後、轆轤により成形されており、内外面及び底部には灰褐色の藁灰釉がかかる。底面には貝殻によると思われる目跡が１箇所残っている。

⑵　瓦

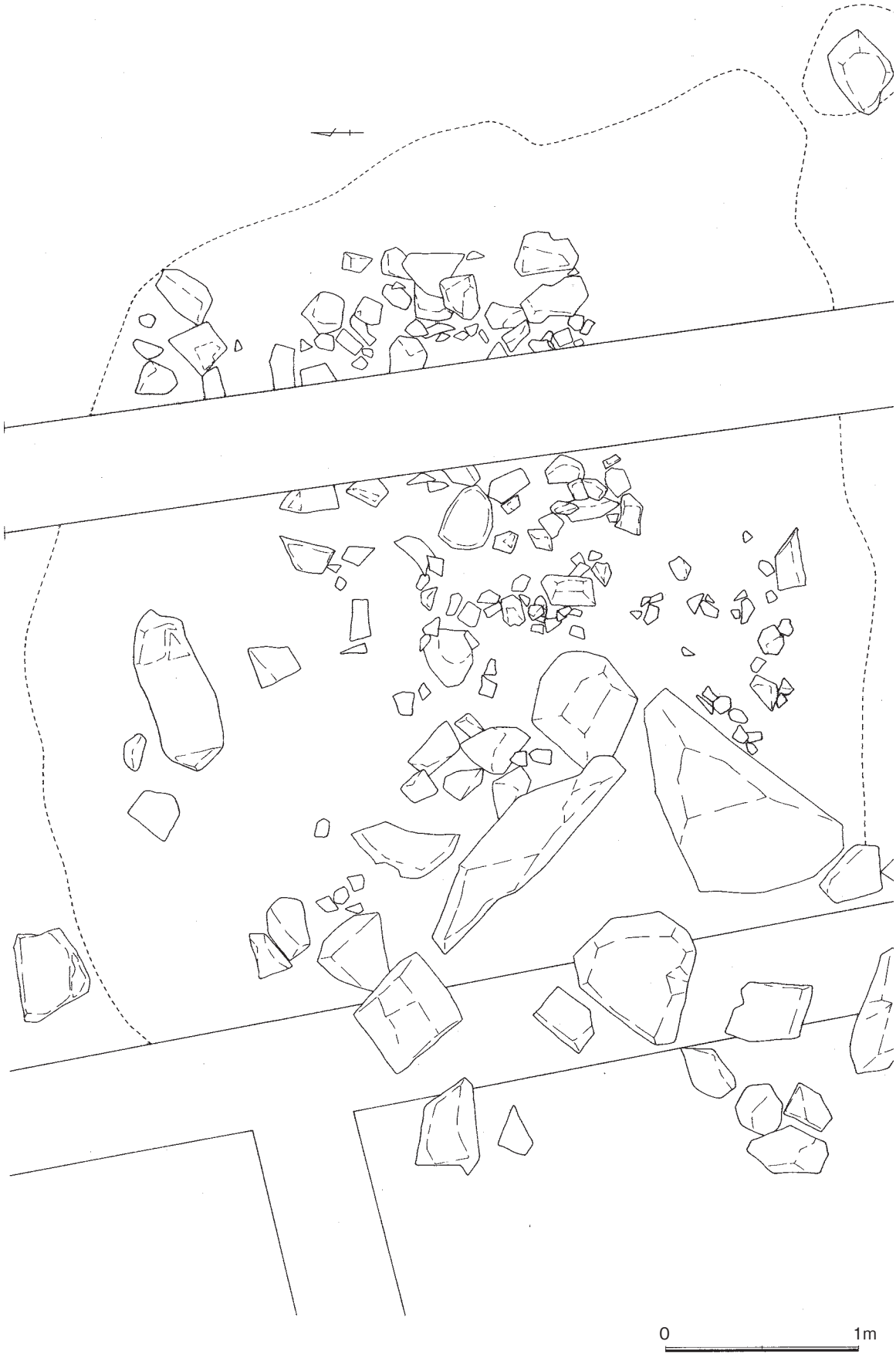
瓦は主に北面と東面の石垣付近と、北側石垣直上に存在する集石３において多く出土している。出土瓦の種類としては、平瓦と丸瓦の破片のみであり、軒平瓦・軒丸瓦をはじめ、飾瓦の類は皆無であった。

３は丸瓦の破片で､表面は燻しが施されている。表面は縦方向にヘラ状工具の痕跡が見られ、裏面にはコビキＢ技法の痕跡がみられる。

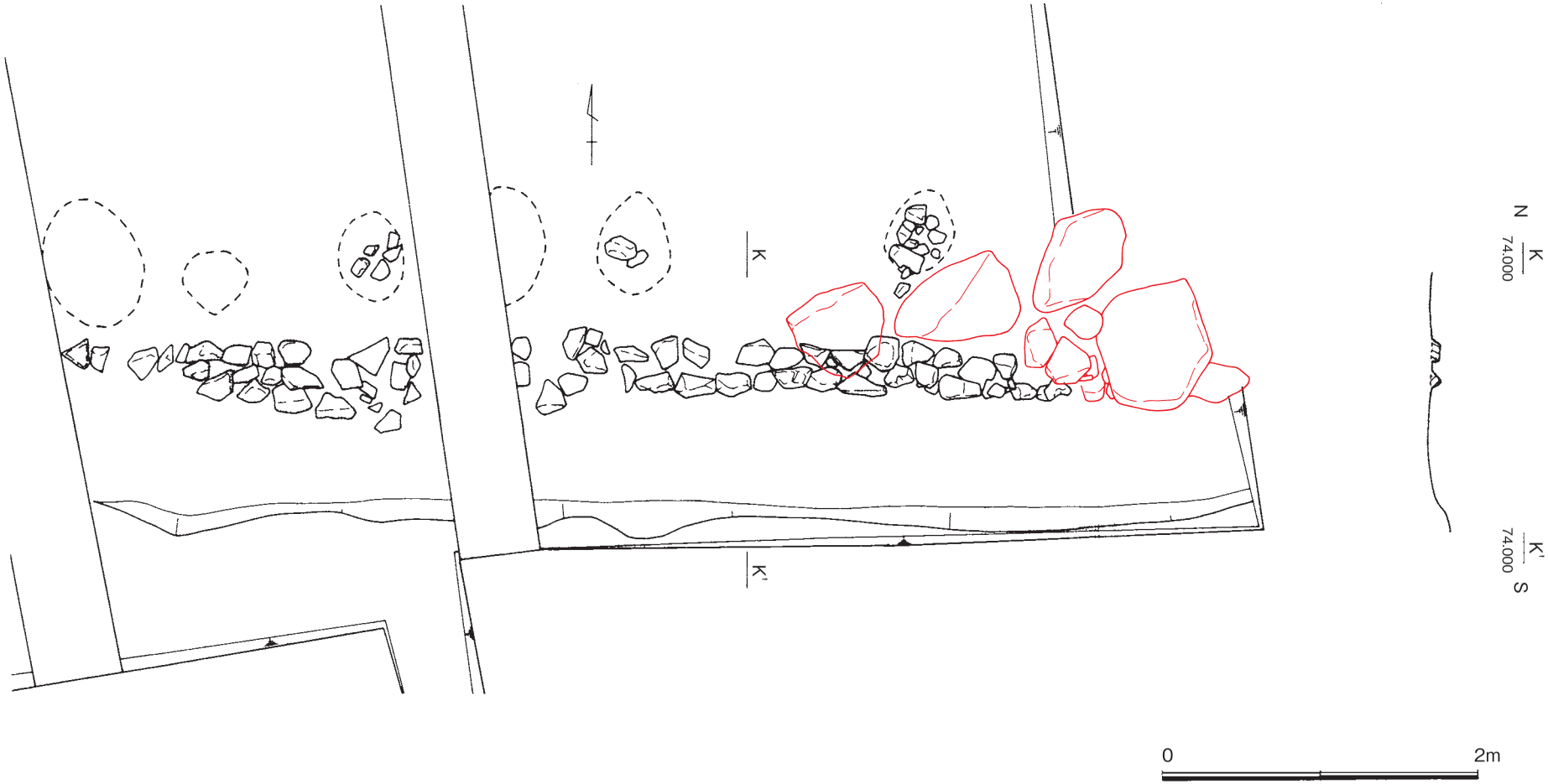
４は平瓦の破片。焼きはやや軟質で、表面は燻しが施されている。裏面の端部付近の調整は甘く、コビキＢ痕が残っている。



第9図　礎石建物跡断面図（S=1/60）

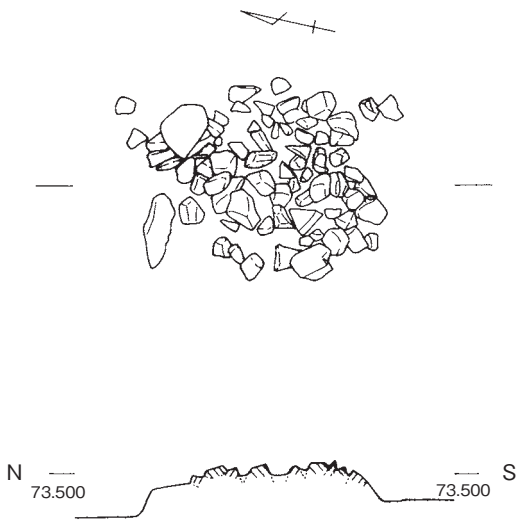


第10図　礎石建物跡内土壙及び集石遺構実測図（S＝1/30）

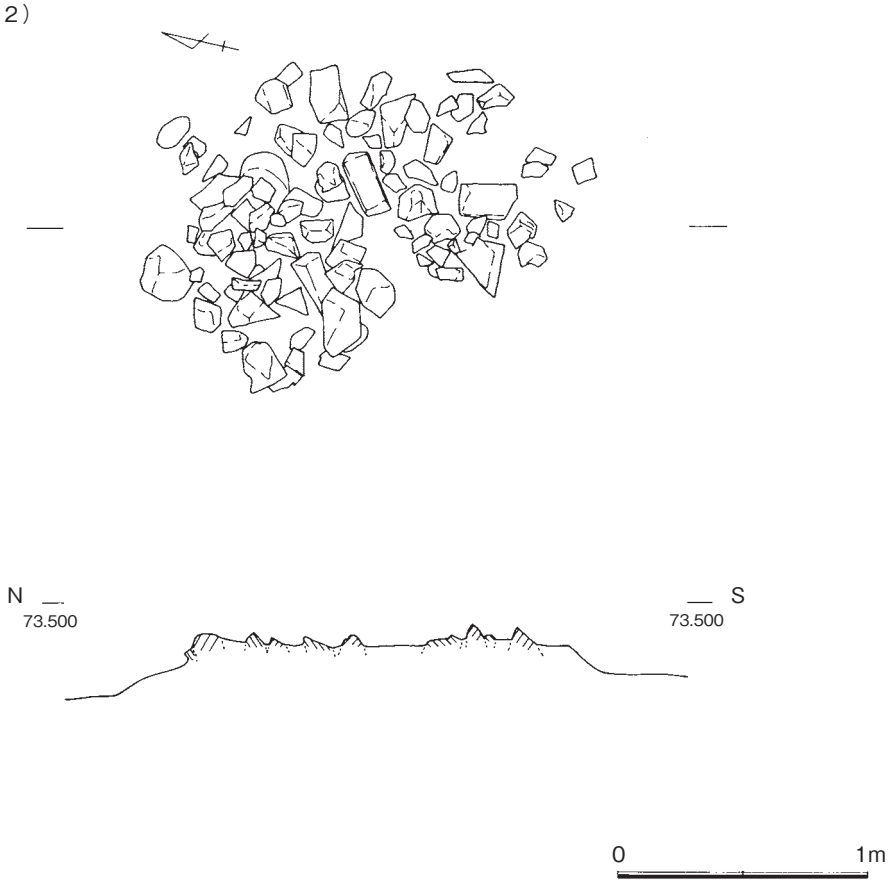


第11図　塀跡実測図（S＝1/40）

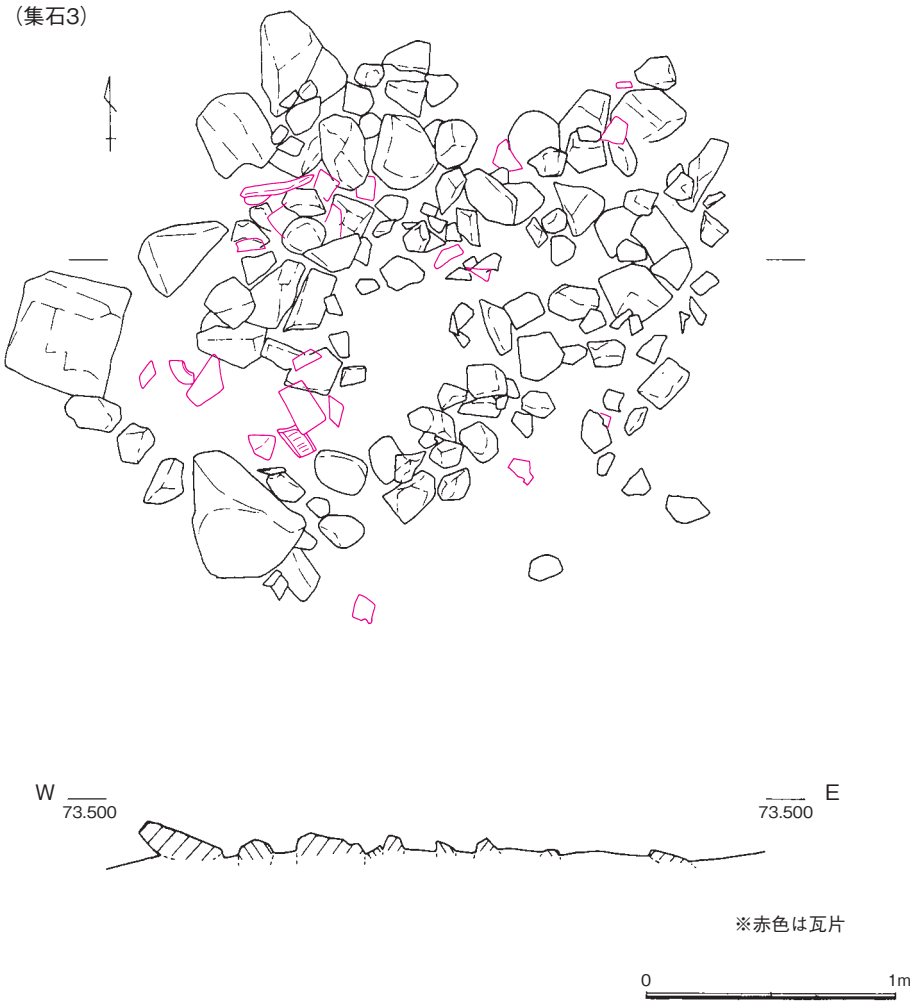
（集石１）



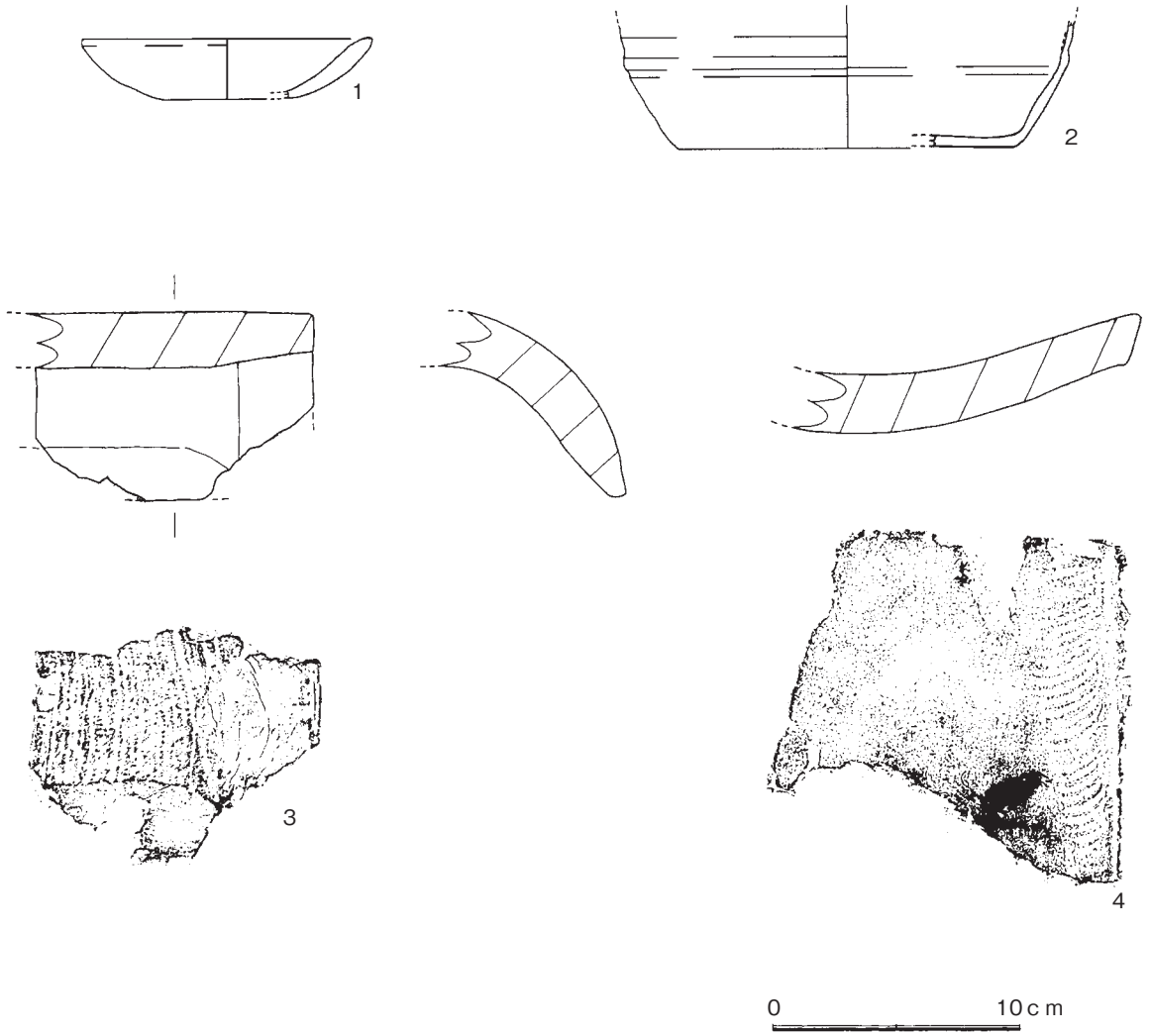
（集石２）



第12図　集石遺構実測図①（S＝1/30）



第13図　集石遺構実測図②（S＝1/30）



第14図　出土遺物実測図（S＝1/3）

表2　出土土器・陶磁器観察表

番号	器種・器形	出土位置（層位）	口径	底径	器高	特徴	備考
1	土師質土器　皿	調査区南西遺構面	11.6㎝	5.0㎝	2.4㎝	手づくね成形。器厚は約7mmと厚め。	京都系土師質土器皿
2	陶器　鉢？	西側石垣トレンチ表土	—	13.6㎝	—	内外面及び底部全体に藁灰釉がかかる。底部には目跡。	唐津？

表3　出土瓦観察表

番号	器種・器形	出土位置（層位）	長さ	幅	厚さ	特徴	備考
3	丸瓦	調査区西側遺構面	—	—	2.2㎝	内面にはコビキＢ痕。	
4	平瓦	北側石垣トレンチ表土	—	—	2.4㎝	裏面端部付近にコビキＢ痕。	

第７節　ま　と　め

⑴　堀尾忠氏とその墓地について

堀尾忠氏は堀尾吉晴の次男として天正６年（1578）に生まれ、天正18年（1590）、長男である金助が、小田原城攻めの陣中で急死したために世継となったと伝わる[1]。

慶長４年（1599）、吉晴の隠居に伴って、遠江国浜松12万石を相続し、その後慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いでは、戦前に三河国池鯉府（愛知県知立市）における水野忠重殺傷事件に巻き込まれて負傷した父に代わって徳川家康率いる東軍に属し、前哨戦で武功を立てた後に本戦にも参陣している。この戦いが東軍の勝利に終わった後にその武功を賞され、同年に出雲・隠岐24万石に加増転封されて父とともに富田城へ入城した。

富田城主となった忠氏は、藩政を行うと同時に、松江の地に新城を建設して本拠地を移すことを計画し、父とともに松江へ赴いて城地の選定を行ったと伝わるが、その最中に病に倒れ、慶長９年（1604）８月４日に急死した。死因は不明であるが、伝説によると城地選定を終えて富田城へ帰る途中、神魂神社の禁足地に入ってマムシに噛まれたためであるとも伝わる。法号は「忠光寺殿前雲州（雲隠両州とも）太守天岫世球大居士」。遺骸は富田新宮谷の忠光寺に葬られたという。

堀尾忠氏の墓地については、松江藩の文学者である桃好裕が明治４年（1871）に執筆した、『出雲私史』によると、忠氏は富田において病死したが、「葬地未詳」と記載されている[2]。また、明治31年（1898）に山口幸五郎（美道）が著した、『廣瀬志』には、「堀尾忠氏墓　在新宮一小山上。石壁擁三面。長六七間許。内有二三石。半没地。蓋為墓碑礎石者乎。荊棘塞路。殆不可登。山麓有田一区。称忠光寺平。忠光寺者。雲州忠氏釈号也。」と記されていることから[3]、古くから当地は堀尾忠氏の墓所と伝わっており、石垣が３面に存在しているが、当時すでに石塔等の墓標はなく、現在見られる状況とほとんど変わらないことが分かる。

なお、当地以外で現在、堀尾忠氏の墓と伝わるものは、松江市玉湯町の報恩寺と、堀尾家の菩提寺である京都府京都市の妙心寺春光院、そして高野山にも存在する。報恩寺の墓石は来待石製で、高さ約2.6ｍを測る巨大な宝篋印塔であり、形式的にも近世初頭のものと考えられる。但し、この塔は昭和38年（1956）に地方史研究所が編集した『出雲・隠岐』によると、堀尾忠晴の髪爪塔とされており[4]、さらに昭和40年（1965）に伊藤菊之輔が著した『出雲の石造美術』においても同様の記述がなされているため[5]、報恩寺の石塔はこの頃は忠氏のものではなく、その子である忠晴の供養塔であると認識されていたようであり注意が必要である。

春光院の墓石も来待石製のもので、報恩寺のものほど大きい塔ではないが、高さ約1.8ｍを測り、同じく来待石で作られた堀尾氏歴代やその一族の墓石と並んで存在している。供養塔的なものであろうか？

忠氏の菩提寺である忠光寺は、今回の調査地点である安来市広瀬町富田字中光寺付近にあったと伝わるが、寺に関する文献や絵図などの資料も現存しておらず、伽藍の状況など、寺の遺構及び性格については一切不明である。

過去の調査としては、昭和56年度に島根県教育委員会が史跡富田城跡関連遺跡群発掘調査の一環として、今年度調査地の西麓谷部の水田中を発掘調査したが、土師質土器と備前焼の破片が数点出土している程度で、遺構は確認されなかった[6]。ただ、昭和56年度調査地の東側隣接地であり、今回調査地点の北側斜面直下には以前水田であったという比較的広い平坦地が存

在しており注目される。

忠光寺に関する記録としては、堀尾忠氏の嫡男である忠晴が松江城主であった元和６年(1620)～寛永10年(1633)頃の松江城下の様子を描いたとみられる『堀尾期松江城下町絵図』(島根大学附属図書館蔵）の中に、松江城の西、現在松江藩松平家の菩提寺である月照寺がある場所に、「忠光寺」と記載されている。このことから推察すると、忠晴の代には、忠光寺が富田から松江へ移転していたと考えられる。

なお、京極氏時代（1634 ～ 1637）の松江城下絵図（香川県丸亀市資料館蔵）においても「忠光寺」と記されていることから、この時期にはまだ寺が存続していたようであるが、その後京極氏に代わって入城した松平氏の頃の城下絵図では、忠光寺の位置に月照寺が建てられており、それ以後忠光寺の名はどこにも見られなくなる[7]。このことから松平氏の治世になると、忠光寺は廃寺となったのかもしれない。

(2) 遺構について

今回の調査では、石垣とそれに伴う建物跡や塀跡の他、集石遺構を検出した。

石垣は北、東、西の三方に築かれている。山佐花崗岩を主体とする荒割石を用いて野面積で構築されており、隅角部は北東隅では算木積みを志向しているとみられる箇所もあり、近世的な技法を感じさせるが、富田城跡の石垣に比べてやや荒い印象を受ける。

礎石建物跡は比較的大きな規模であり、南西部に入口を持つものであると考えられる。後世に礎石が複数動かされたとみられ、欠失している部分もあるが、建物の規模と平面形状は概ね判断できた。

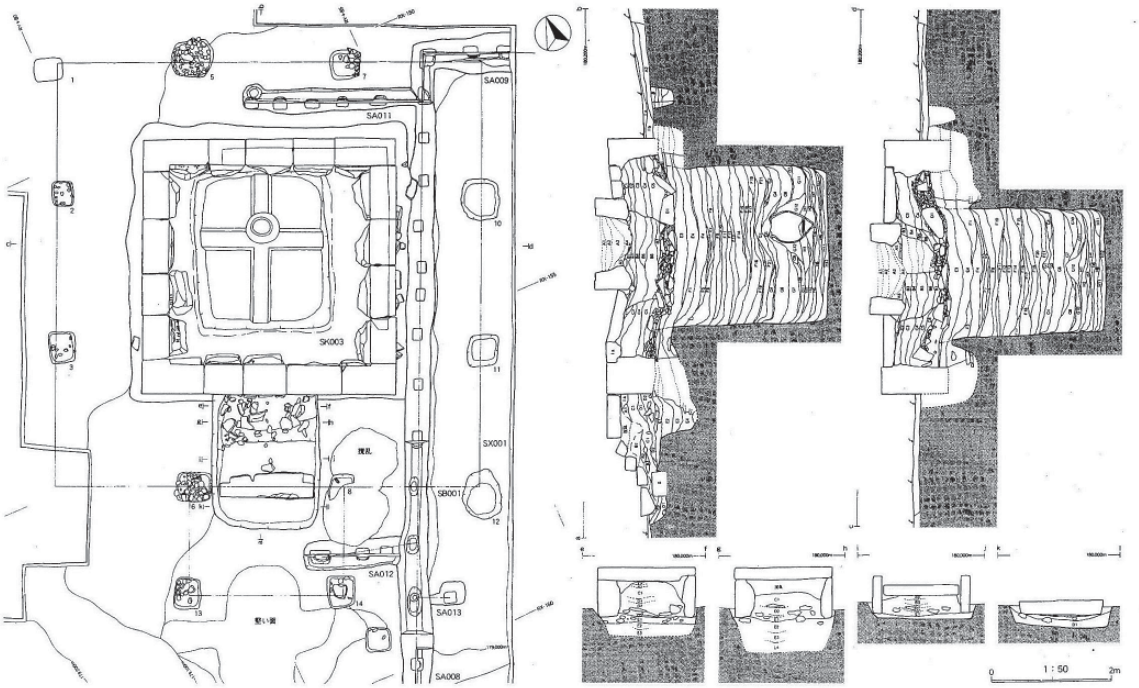
近世大名家の墓所は、仙台藩初代伊達政宗の墓所瑞鳳殿に代表されるように、埋葬施設の上部に御霊屋を建設する例も多く見られることから、この建物跡も御霊屋である可能性もあるが、一般的に大名家墓の御霊屋は正方形の平面形状を持ち、入口も正面に位置するのに対し、本遺跡の礎石建物は長方形プランで南面西寄りに入口があるなど、大きく異なる印象を受ける。

この礎石建物の内側西半部では遺構は検出されず、広場的な空間となっているが、中央付近から東側にかけて長楕円形を呈する大型のプランを検出し、その中央において大小の石材が集中している部分があった。

大名墓を含め近世墓の埋葬施設では、被葬者を埋葬して墓壙を埋め戻す際、墓壙の直上に大小の割石を敷き詰めたり、埋め戻しに割石や礫を用いている事例も多いことから、本遺構も集石の直下に埋葬施設が存在する可能性が高い。

集石の周辺で検出した大型のプランについては、内部の調査を行っていないため性格は不明であるが、他地域の大名墓の調査事例では、墓壙上に石塔等の墓標を建てる際、基壇や厨子台を据えるために掘り方を設けるものがあり、もしかすると本遺跡で検出した大型のプランも、これらを据えていた跡である可能性も考えられる。

こうした遺構の状況に類似したものは各地の大名家墓地でもいくつか見られ、一例をあげると岩手県盛岡市聖壽禅寺境内にある盛岡藩三代藩主南部重直（1664年没）の墓がある。（図16）平成８～９年にかけて修理に伴って発掘調査が実施された。その結果によると、上部施設は基壇上に五輪塔を設置したもので、地下構造はまず幅約５ｍ、深さ約50 ～ 70㎝程度の浅い方形の掘り方を掘り、その中央付近に深さ約2.5ｍの墓壙を掘り込んでおり、墓壙内に遺骨を入れた常滑焼の甕を納めて地表近くまで埋め戻した後、直上に花崗岩の割石を敷き詰めており、それを囲むように基壇石を据えている[8]。



第15図　近世大名墓の埋葬施設の例
（盛岡藩主・南部重直墓、『聖壽禅寺南部重直墓所発掘調査報告書』盛岡市教委1998より転載）

堀尾忠氏墓がこの南部重直墓と同様な構造であったとは断定できないが、今回の調査で検出した集石とそれを囲むようなプランの性格を推定する上において一つの手がかりになると思われる。

また、礎石建物跡の周辺において検出した集石１～３は、それぞれ規模の違いはあるが、使用されている石材や集石の状態が礎石建物内の集石遺構と似ていることから墓である可能性もある。しかしこれらの石材には、集石３のように多くの瓦片が混在しているものもあるため、その性格については今後も検討していく必要がある。

もし墓とするならば被葬者はだれであったのか推測すると、これらの集石は礎石建物を取り囲むように存在していることから、忠氏の死去に伴って殉死した人物の墓である可能性もある。

本遺跡が造られた近世初頭頃は、戦国時代を生き抜いた武将も多く存命中であり、主君が死去した際に、側近の家臣が後を追って殉死する風習がまだ色濃く残っていた時期である。堀尾氏においても後年、寛永10年（1633）に忠氏の世継である忠晴が死去した際、側近の松村監物が殉死しており[9]、この風習は寛文３年（1665）に武家諸法度が発布されて殉死が禁止されるまで続いた。

⑶　遺物について

遺物には土師質土器皿片や唐津焼の鉢または徳利とみられる破片などの他、丸瓦や平瓦が出土した。土師質土器皿は手づくね成形を用いたいわゆる京都系の皿である。この土器は富田城跡やその城下町跡である富田川河床遺跡を中心として多数出土しており、中世～近世初頭にかけて普遍的にみられるものである。特徴の変遷としては、中世期のものは器壁が薄く表面の調整が丁寧であるのに対し、時期が新しくなるにつれ器壁の肥厚化が顕著となり、器自体も歪みが多く調整も雑になっていく傾向がある。本遺跡の出土品も口縁部分の器壁の肥厚化が顕著で、器表面の調整も雑であることから、近世初頭頃のものであると思われる。唐津焼は器形が特定できるような部位が出土していないため、具体的な年代は決定できないが、タタキ成形を用い

て作られていることから、概ね近世初頭頃のものと考えられる。

瓦類は丸瓦と平瓦のみであり、軒平瓦や軒丸瓦は出土しなかった。瓦の年代としては、丸瓦の内側にコビキＢ技法の粘土切り離し痕が見られることから、これも概ね近世初頭のものと判断できる。出土位置などから石垣上の土塀に葺かれていたものとみられるが、その場合本来あるべきはずの軒丸瓦や軒平瓦が今回の調査では一切出土していないことから、墓地の移転などに伴って使用に耐えうる瓦については持ち去られている可能性もある。

⑷　おわりに

以上の調査結果から本遺跡は概ね近世初頭に属するものと判断した。この年代観は堀尾忠氏が没した慶長９年という年代とも矛盾しない。

また、検出した遺構も、石塔などの上部構造物は検出されなかったものの、石垣と塀で囲まれた空間の中央に御霊屋と推定される礎石建物跡があり、その内部に埋葬箇所とみられる大型の掘り方プランと集石がみられるなど、近世大名の墓としての条件を十分備えているため、この場所が堀尾忠氏の墓地である可能性がより強まったといえよう。

また、近世大名墓の上部構造については、御霊屋を持つものと持たないものがあり、御霊屋内部の状況については、主に①石塔などの墓標を据えるもの。②祭壇上に位牌を安置するもの。③祭壇上に被葬者の影像を安置するもの。④石塔に加え位牌または影像を安置するものなどがある。

本遺跡の上部構造が上記①～④のいずれであったかは現時点では判断できないが、いずれにせよ島根県内における大名墓推定地の初の調査事例として、一定の成果を挙げることができたと言えよう。

【注】

⑴　堀尾金助については不明な部分が多く、忠氏が長男であるという説もある

⑵　桃好裕『和譯出雲私史』1871

⑶　山口幸五郎『廣瀬志』1899

⑷　地方史研究所『出雲・隠岐』平凡社1963

⑸　伊藤菊之輔『出雲の石造美術』1965

⑹　島根県教育委員会『史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書』1983

⑺　松江市歴史館、新庄正典氏の御教示による。

⑻　盛岡市教育委員会『聖壽禅寺南部重直墓所発掘調査報告書』1998

⑼「堀尾古記」『新修島根県史　史料編２　近世上』島根県1965

【その他参考文献】

・坂詰秀一他『近世大名墓所要覧』考古調査ハンドブック４　ニューサイエンス社 2010

・大野哲二・中原　斉「鳥取藩主池田家墓所の調査」『近世大名家墓所調査の現状と課題』立正大学考古学会・立正大学考古学研究室・石造文化財調査研究所2010

第Ⅲ章　日向尾根古墳群

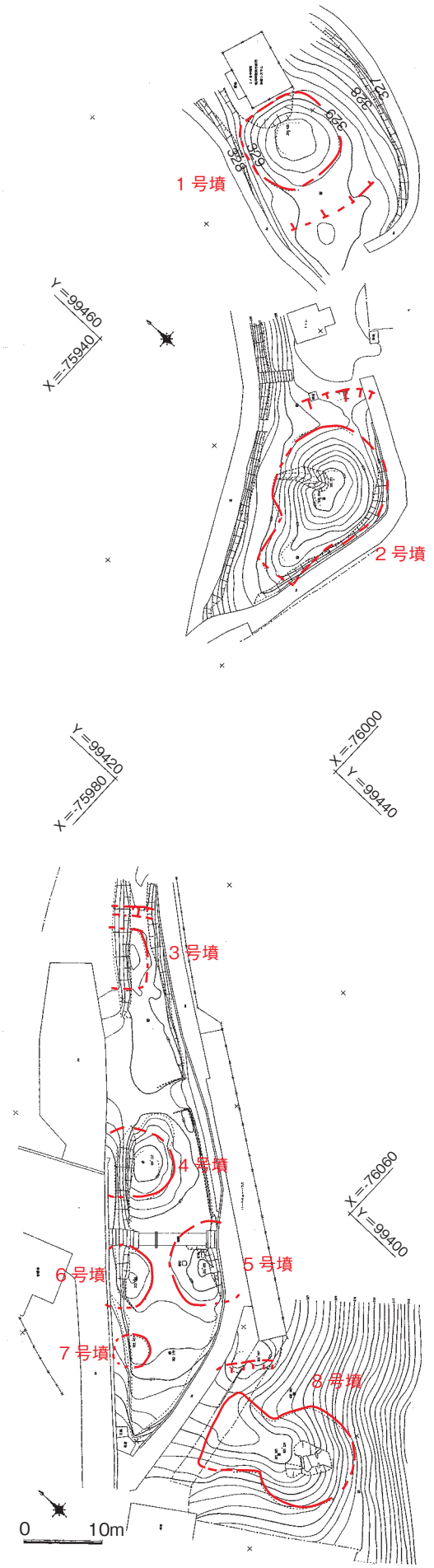
第1節　位置と環境

今回測量調査を実施した日向尾根古墳群は、島根県安来市伯太町横屋、赤屋、高江寸次のそれぞれの地区にまたがる丘陵上に立地している。

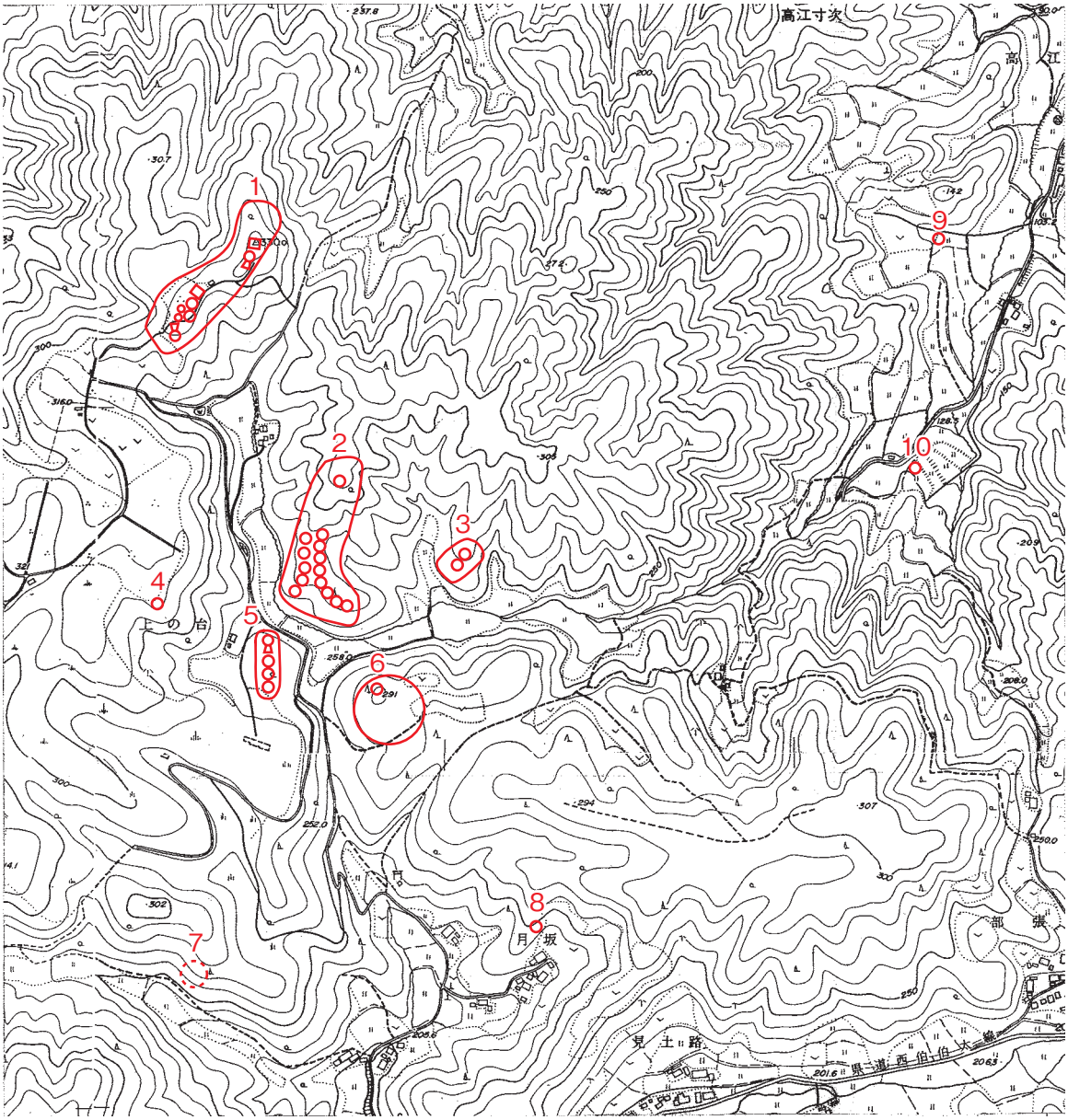
安来市伯太町地域のほぼ中央部を北流する伯太川は、島根・鳥取両県の県境分水界にその源を発し、上流から中流にかけて多くの支流をもち、井尻あたりから次第に広がり母里・安田あたりから広くゆったり流れ天井川となり中海に注ぐ。同地域の地形は、高度が高く起伏が大きい山地性の南部と、高度・起伏とも小さい丘陵性の北部とに分けることができる。日向尾根古墳群が所在する南部地域の山々は、斜面が比較的急峻で谷が深いにもかかわらず、その上にそびえる山頂や山稜の形は、意外にもなだらかであって、円味を帯びたおだやかな山容を呈しているのが特徴である。このような山容は、同古墳群が立地する上の台地区や比婆山など多くの山々でその傾向が認められる[1]。

さて、日向尾根古墳群が所在する安来市伯太町域南部地域の遺跡を見て行くと、縄文時代、弥生時代の遺跡が確認されているが数は少ない。古墳時代になると比婆山山頂部の他、谷山麓などに古墳が築造される。その多くは後期古墳と考えられ、伯太町北部には低丘陵上に古墳・横穴墓が数多く密集して築造されるのに対し、南部は横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳が点在して築造されるのが特徴である。

日向尾根古墳群は、伯太川をはさんで比婆山に向う上の台と呼ばれる地区に所在し、最高所の標高約330mの日向峰から約200mの馬場谷にわたるかなり高所の谷頭、尾根筋に前方後円墳3基を含む古墳が密集して築造されており、伯太町南部地域の古墳群の中では特異な存在として知られている[2]。



第16図　日向尾根古墳群分布図（S＝1/800）



1	日向尾根古墳群	本書、9基（前方後円墳2、円墳3、方墳1、不明2、消滅1）
2	小松伏古墳群	14基（円墳14、消滅3）、円筒埴輪・土製支脚
3	天神堀古墳群	3基（円墳2、消滅1）、須恵器
4	穴畑峰古墳群	2基（不明1、消滅1、木棺直葬）、円筒埴輪
5	小丸子山古墳群	5基（前方後円墳1、円墳3、不明1）、須恵器（蓋坏）・円筒埴輪
6	ノロ山古墳群	2基（不明1、消滅1、石室）
7	馬場谷古墳	1基（不明1、横穴式石室）
8	比田敬三郎宅裏山横穴	1穴（長方形丸天井）
9	岩屋谷1号墳	1基（不明、横穴式石室）、須恵器（蓋坏、高坏、提瓶）・勾玉
10	岩屋谷2号墳	1基（不明、横穴式石室）、須恵器

第17図　日向尾根古墳群とその周辺の古墳群（S＝1/10,000）

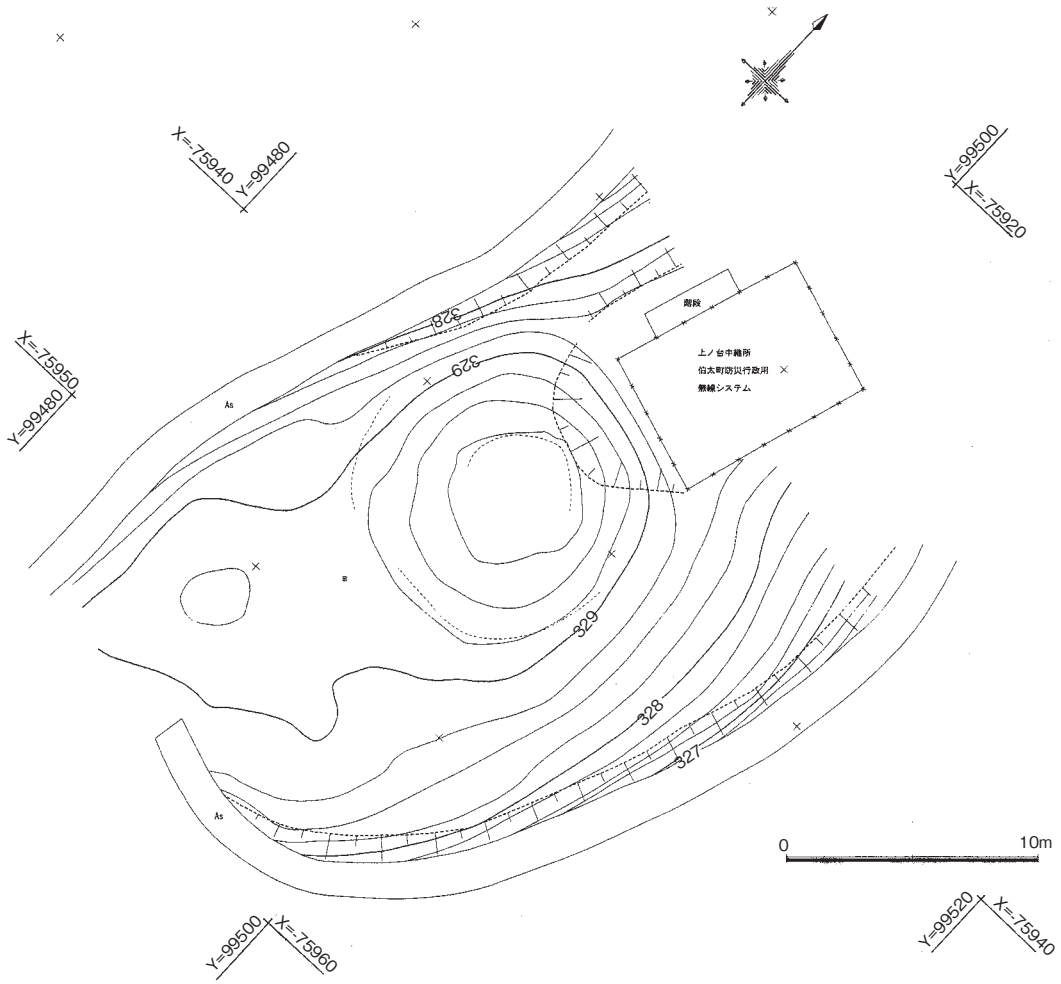
第２節　調査の概要

従来、上の台緑の村敷地内に所在する古墳群は、同一尾根上に近接して立地しているのにも関わらず、丘陵尾根北東側より日向尾根古墳、日向峰古墳群、森木峰古墳群の３つの古墳群の名称に分けられていた。これら古墳群を別の古墳群として区別する必要がないことや隣接する古墳群で「日向尾根古墳」、「日向峰古墳群」という名称は紛らわしいこと等から今回の調査で整理し、日向尾根古墳群に名称を統一することにした。この日向尾根古墳群の番号は、同古墳群の北東に所在する従来の日向尾根古墳から従来の日向峰古墳群・森木峰古墳群にかけて順に番号を付した。

測量調査は2009年５月に実施した。調査中に表採遺物を得ることはなかった。以下、調査の概要を示す。

(1)　１号墳

１号墳は旧来日向尾根古墳と呼ばれていた古墳で、北東―南西方向に延びる丘陵頂部の標高約329m付近に位置する。古墳群中最も北東側の高所に築かれ、墳頂部には三角点が設置されている。比婆山を正面に臨み、与市の集落、遠くは中海まで望むことができる。２～７号墳を望むことができるが、８号墳を見る事はできない。周辺の古墳では小丸子山古墳群、小松伏古



第18図　日向尾根１号墳地形測量図（S＝1/300）

墳群、ノロ山古墳を望むことができる。

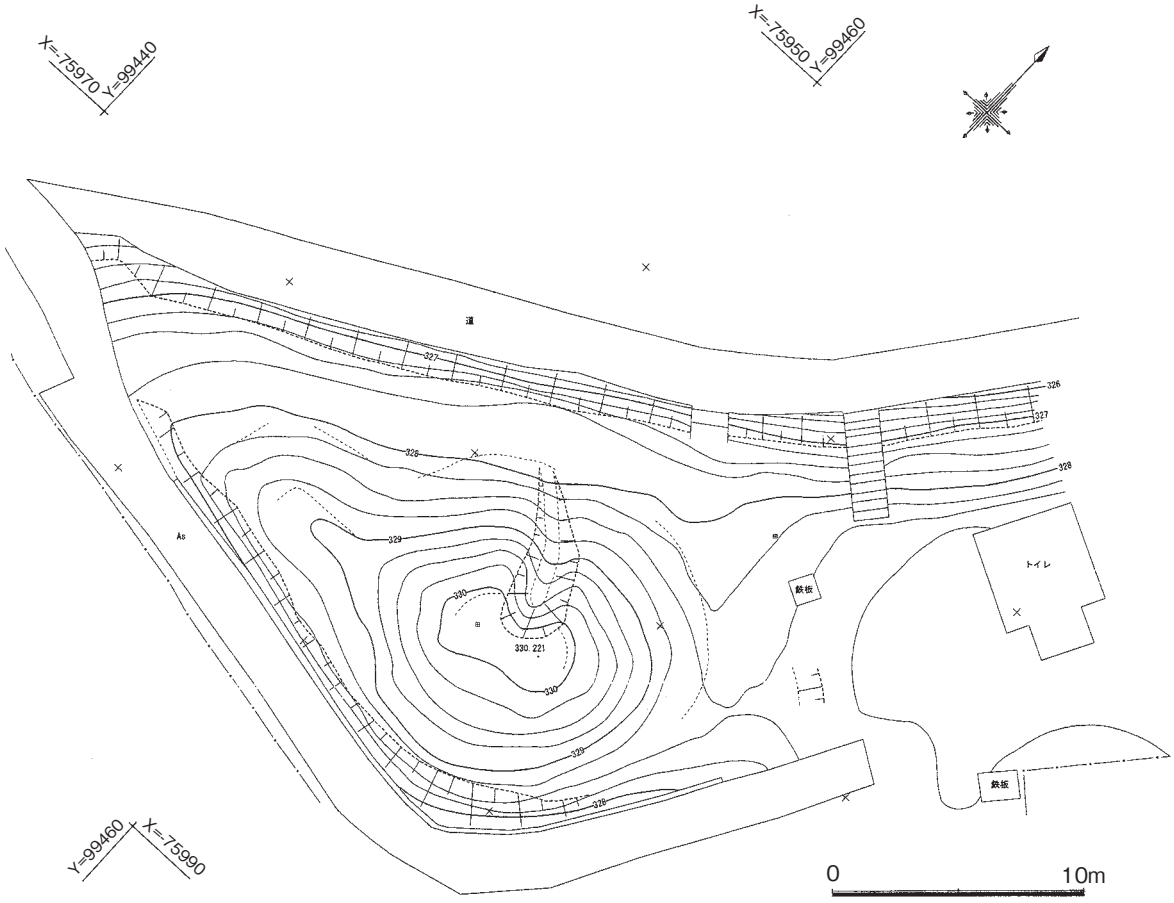
墳丘をほぼ南北方向に主軸を持つ方墳である。墳丘北側は建造物を構築する際の造成で墳丘が削られている。また、墳丘西側も道によって墳裾が削られている可能性がある。規模は、東西方向一辺約11ｍで南北方向もほぼ同様の規模であると考えられる。墳頂平坦面は現状で一辺約4m程度、高さは南辺、東辺で約0.5m、西側で約1.0ｍを測る。南側には丘陵を切断し墳丘を築造した痕跡がわずかながら認められる。

(2)　２号墳

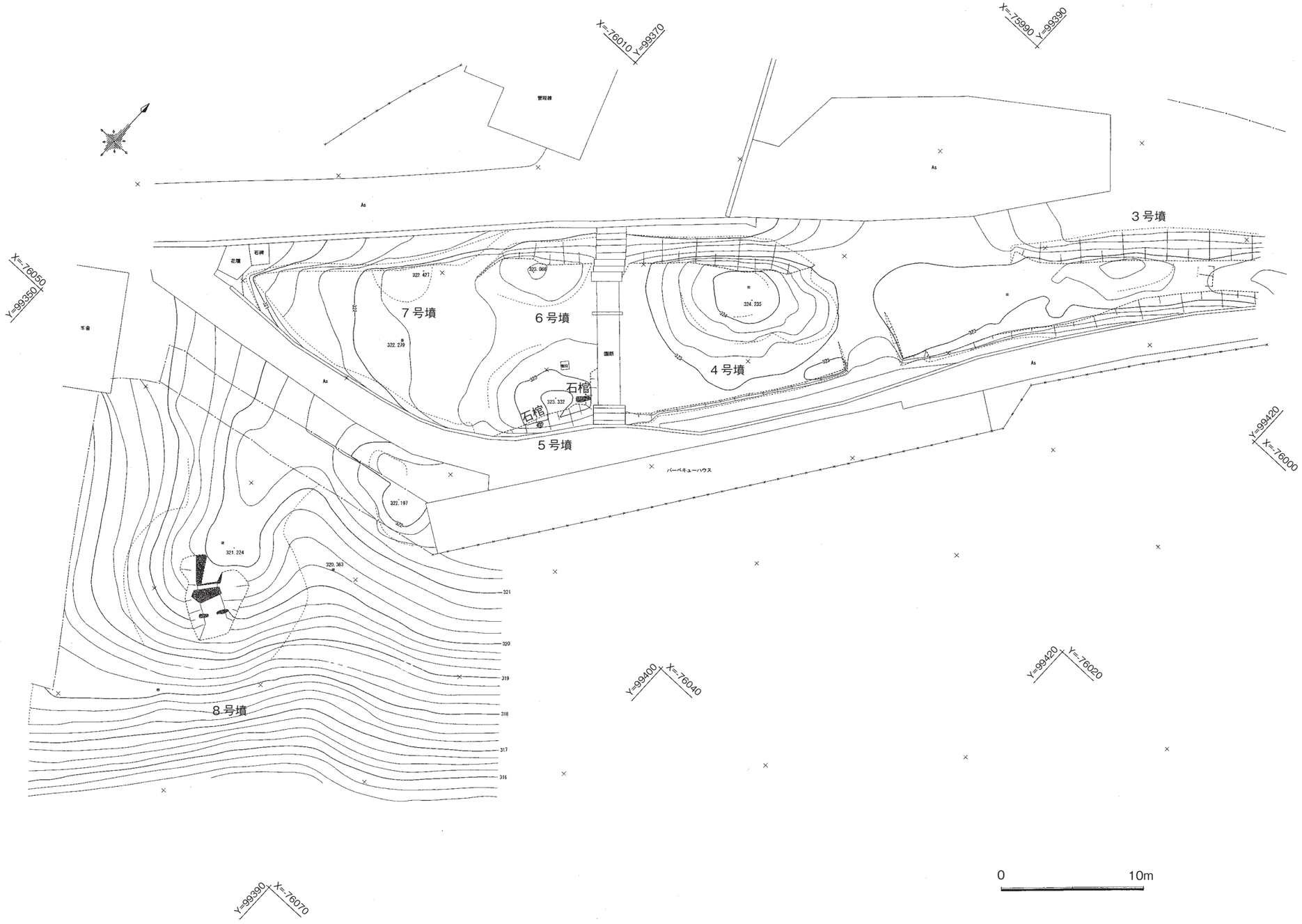
２号墳は従来日向峰3号墳と呼ばれていたもので、1号墳から北東方向に約30m離れたやや下がったほぼ南西方向に延びる丘陵頂部の標高約328ｍ付近に位置する。ただ、墳頂部の標高は1号墳と同様の約330m を測る。周辺の眺望は1号墳とほぼ同様であるが、特にこの周辺地域の盟主墳と考えられる全長約30m の前方後円墳・小丸子山1号墳[3]を谷を挟んで正面に臨むことができる。

墳丘は尾根筋と同じく東西方向に主軸を持つ前方後円墳である。後円部南東側、前方部南側の墳丘を道によって削られている。規模は全長約21m、後円部径約14 ～ 15m･高さ約2.0 ～ 2.5ｍ･墳頂部径約5m、前方部全長約6 ～ 7m、高さ約0.5 ～ 1.0ｍ、後円部と前方部の比高差約1.0ｍを測る。後円部北東側に幅約4 ～ 5ｍの丘陵を切断し墳丘を築造した痕跡が認められる。

後円部頂から北西方向に向けて幅約２ｍの盗掘坑が認められる。現在は土砂で覆われ確認で



第19図　日向尾根２号墳地形測量図（S＝1/300）



第20図　日向尾根　3～8号墳　地形測量図（S＝1/300）

きないが、以前は石室が露出してあったという[2]。

(3)　３号墳

２号墳より約5m下った標高約323mの西側約45mの丘陵尾根上に位置する。

墳丘は現状では方墳のようにも観察されるが、墳丘は北西側、南東側から大きく削平されており墳形は判然としない。残存長約７～8m、高さ約0.5mを測る。丘陵基軸側に幅約3mの丘陵を切断し墳丘を築造した痕跡が認められる。

(4)　４号墳

４号墳は従来日向峰２号墳と呼ばれていたもので、３号墳から南西側に約9m離れた標高約323.5ｍの丘陵尾根上に位置する。

墳丘は北西側が大きく削平されている。現状では径約８～9m、高さ約0.5ｍ、墳頂部径約4mの円墳のように観察されるが、この墳丘の東側に接して長さ約3.0m、高さ約0.5ｍの張り出しのような地形が確認され、これが墳丘であれば全長約11ｍの前方後円墳、もしくは造り出し付き円墳の可能性が考えられる。

(5)　５号墳

５号墳は従来日向峰３号墳と呼ばれていたもので、４号墳・６号墳と隣接する標高約322.5ｍの丘陵尾根上に位置する。

墳丘は東側及び墳頂部が大きく削平されており、墳丘上の２箇所で箱式石棺と考えられる石材が露出している。現状では円墳のように観察され、残存径約9m、高さ約0.5～1.0ｍを測る。

露出している石棺材であるが、１つは墳丘北東側に位置し長辺が約1mの扁平な石材のように観察される。もう一つの石材は削平された東側の墳丘断面に露出しており、やや小型のもので幅約0.5mを測る。これらの石材はそれぞれ別々の主体部の石材と考えられる。

(6)　６号墳

６号墳は、標高約322.5mの丘陵尾根上に５号墳と並列して築かれている。

墳丘北西側が大きく削平を受けており、残存する墳丘は全体の1/2以下である。現状では円墳と観察され、径約7.5m、高さ約0.5mを測る。

(7)　７号墳

７号墳は６号墳からやや下がった標高約322mの丘陵尾根上に築かれている。

墳丘北西側が大きく削られ、残存する墳丘は全体の1/2程度である。墳形は円墳と考えられ、径約4.5m、高さ約0.5m以下の小型の墳丘である。

(8)　８号墳[4]

８号墳は従来森木峰古墳群と呼ばれていたもので、６号墳から南側に丘陵尾根上からやや下った標高約319～320mの位置に築かれている。

墳丘は主軸を北西－南東方向に持つ前方後円墳である。後円部を斜面側の南東側に持ち、前方部端は判然としない。全長15ｍ以上、後円部径約12～13m・高さ約2.0～2.5m、前方部長3m以上・高さ約0.5～1.0m、くびれ部幅約７ｍを測る。丘陵尾根を切断し墳丘を築いた痕跡が墳丘北東側に認められ、前方部端にも同様な痕跡があるものと推測される。

後円部に南東方向に開口する横穴式石室が露出している。現在は内部が埋まっており確認することができないが、明治年間に横穴式石室が発見され、子どもがよく侵入したといい、その

規模は長さ 4.5m、幅2.5m だという[2]。

(9)　９号墳

９号墳は森木峰古墳群と呼ばれていたものである。現在は消滅しており詳細は不明である。

第3節　ま　と　め

日向尾根古墳群は上の台と呼ばれる標高約320 ～ 330m の高所に築かれた９基からなる古墳群である。特筆すべきは、その立地と小型ながら前方後円墳を２基築かれていることである。

この古墳群が築造された時期であるが、遺物は出土していないが、小型ながら２基の前方後円墳が築かれ、そのいずれも横穴式石室を主体部に持つことから、出雲地域の横穴式石室の導入や前方後円墳が築かれる時期から考えると古墳時代後期・6世紀中葉～後葉にかけてと推定される。

この古墳群の周辺に眼をやると、高所にもかかわらず上の台と呼ばれる標高約200 ～ 300ｍの各尾根上に数基からなる古墳群が築造され、安来市伯太町南部の他地域と比較して古墳の築造密度が非常に高い状況に特徴がある。また、その分布状況は高江地区の谷頭から上の台に至るＬ字状に曲がる非常に小さな谷に面して（小さな谷を意識して）多く分布しているのが特徴的である[5]。

東森市良氏はこれら古墳群を一括して上の台古墳群と銘名し、生産活動の相違（製鉄か？）か、或は宗教的な意義等が考えられるが簡単に決められないとしている[2]。

今回の調査で、上の台地区において他の地域と比較して高所に前方後円墳が３基を含む 40基近い古墳群が密集して築かれるという特異な状況であることを改めて認識され、その歴史的背景の解明にはさらなる調査が必要である。

＜注＞

(1)　草光　繁「第一編　自然環境」『伯太町史』1962年

(2)　東森市良「第二編　伯太地域の歴史」『伯太町史』1962年

(3)　丘陵頂部に位置する全長約30m の前方後円墳で、後円部・前方部のいずれも横穴式石室を主体部に持つ古墳。従来は円墳２基（小丸子山1号墳・2号墳）と考えられていた。

(4)　測量した当時（2009年5月）、前方部上に羊等の柵が二重になっていたが、現在（2011年3月）では北西側の柵が外され、南東側の柵のみとなっている。

(5)　第18図参照

写　真　図　版

堀尾忠氏像（京都府京都市・春光院蔵）

伝・堀尾忠氏墓遠景（中央の尾根頂部）

調査前の状況（南東から）

伝・堀尾忠氏墓の集石（南から）

北面石垣（北西から）

北面石垣西端部（北から）

東面石垣（北から）

東面石垣（東から）

東面石垣の隅角部（東から）

西面石垣（北西から）

北面石垣トレンチ（北から）

北面石垣トレンチ土層（西から）

東面石垣トレンチ（東から）

東面石垣トレンチ土層①（南東から）

東面石垣トレンチ土層②（南から）

西面石垣トレンチ及び土層（南から）

石垣上平坦部調査状況（南東から）

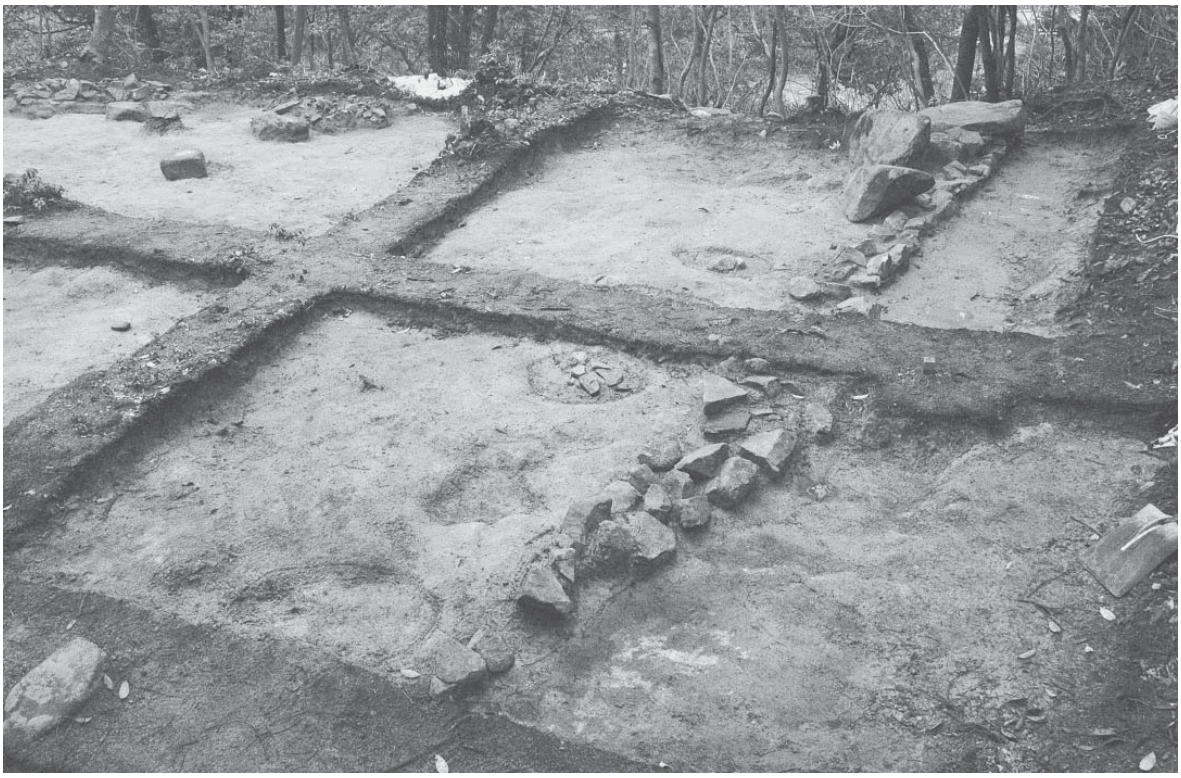
礎石建物跡入口礎石（南から）

建物跡西部礎石列（南から）

建物跡東部及び南部礎石列（北西から）

建物跡北部礎石列（東から）

礎石建物跡内土壙及び集石遺構検出状況（南から）



塀跡及びピット列（南西から）

集石遺構１（西から）

集石遺構２（西から）

集石遺構３（南東から）

集石遺構３瓦片出土状況（西から）

出土遺物

京都府・春光院の堀尾忠氏墓（中央が忠氏、左は忠氏妻、右は祖父泰晴夫妻の石廟）

「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）

同・忠光寺部分拡大

日向尾根１号墳（南から）

日向尾根２号墳（北東から）

日向尾根３号墳（南西から）

日向尾根４号墳（北東から）

日向尾根５号墳（北から）

日向尾根５号墳石棺１
（南東から）

日向尾根５号墳石棺２
（東から）

日向尾根６号墳（北東から）

日向尾根７号墳（東から）

日向尾根８号墳（北から）

日向尾根８号墳石室
（北東から）

日向尾根８号墳石室
（南西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	でん・ほりおただうじぼ　　ひゅうがおねこふんぐん
書　名	伝・堀尾忠氏墓　　日向尾根古墳群
シリーズ名・番号	安来市内遺跡発掘調査報告書１
編集者名	舟 木　　聡、水口　晶郎
編集機関	安来市教育委員会
所在地	〒692-0207　島根県安来市伯太町東母里580番地　　TEL　0854-23-3316
発行機関	やすぎしきょういくいいんかい
発行年月日	2011年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯：東経	調査面積	調査年月日
		市町村	遺跡			
伝・堀尾忠氏墓	安来市広瀬町 富田	32206	C 28	北緯35度36分40秒 東経133度19分42秒	280㎡	2010年５月～ 2011年１月
調査原因	学術調査					
日向尾根古墳群	安来市伯太町 赤屋	32206	B 11 B 45 B 46	北緯35度31分9秒 東経133度26分7秒	3200㎡	2009年５月
調査原因	学術調査					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
伝・堀尾忠氏墓	古墓	江戸	礎石建物、塀跡、集石遺構、石垣	土師質土器、陶磁器、瓦	
日向尾根古墳群	古墳	古墳	前方後円墳2、円墳3、方墳1、墳形不明2		

安来市内遺跡発掘調査報告書 1

伝・堀尾忠氏墓

日向尾根古墳群

平成23(2011)年3月発行

発行　　安 来 市 教 育 委 員 会

印刷　　(有)太 陽 平 版